黒歴史小説　トリプルエッジ

味噌村　幸太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏祭りの日、関門海峡で爆破事件が起こった。

そこで生き残ったのは少女、真帆。彼氏の俊介。刑事の青山。

３人はそれぞれの大事な人のために伝説の魔族、日本の妖怪、謎のバケモノに協力することになる。

想えば想うほどに歯車が狂いだす……。

目次

第一章　真帆
1—1　1
1—2　1
1—3　9
1—4　14
第二章　俊介
2—1　21
2—2
2—3
第三章　青山
3—1　34
3—2
3—3　39
3—4　47
第四章　ハーク
4—1　53
4—2　58
4—3
第五章　婦子羅姫
5—1　67
5—2　72
5—3　79
第六章　ドラム
6—1　84
6—2　90
6—3　99
第七章　窓
7—1　107
7—2　116
7—3　122

第八章　黒王
7—4 ―― 130
8—1 ―― 135
8—2 ―― 141
8—3 ―― 146
8—4 ―― 151
第九章　月花陣
9—1 ―― 156
9—2 ―― 156
第十章　タイガの剣
10—1 ―― 164
10—2 ―― 173
10—3 ―― 178
10—4 ―― 178
第十一章　幻想交響曲
11—1 ―― 184
11—2 ―― 190
第十二章　怒黒殺
12—1 ―― 198
第十三章　白い翼　最終章　ルージュ
13—1 ―― 204
14—1 ―― 204

第一章　真帆

1―1　1―2

1―1

その日、私はおろしたての浴衣を着て、慣れないルージュを友だちに塗ってもらい、花火大会の会場である海峡へと向かった。

だが、その日、花火は打ち上げられなかった。

その日、私を待っているひとはいなかった。代わりに、真っ黒で入道雲のみたいな巨人が海峡の前に立っていた。

とても、とても、こわい顔をしていた。

でも、なんだか寂しそうな目をしていた。

そして、花火の代わりに、一筋の大きな光りが空へと昇っていった。

とても、きれいだった。

でも、その光りは大勢の人々をまきこんで、空に消えた。私はそれを見るのがとても、くるしかった。

その日……その日……その日、先輩は来なかった。

1—2

暗くて冷たいベッド……。

ここはとても暗い部屋、誰もいない部屋、ベッドが一つしかない部屋。

たまに、外から人の声がする。でも、私は話せない。外の声は近いようで遠い。だから、私は話せない。

『人と話したい……』

部屋に響くのは、私の声だけ。

ふと、冷たい壁に耳をあててみる。

何にもない……。

人が一人もいない、誰もいない、先輩もいない。

時間の感覚もない。私はただ、ボーっととするだけ……。

ぴーひゃらら！　どんどんどん！

静かな部屋に、大きな音が響いた。

いつもは人の声だけなのに、今回は何か音楽のような、サーカスとか大道芸で使われ

るような音が聞こえた。
『眠りにつくのは早いですね。お嬢様』
暗い部屋の、ある一点にスポットライトがあてられた。
そこにはピエロの格好をしている小さな人形が立っていた。
頭の上には、二つに別れたとんがり帽子があって、顔は白いマスクで隠されている。
「だれ？」
ピエロは軽いおじぎをして、私の手のひらに飛び乗った。
「失礼、お嬢様。私はご覧のとおり、ピエロでございます」
「ピエロさんが何か用？」
ピエロは私の手のひらの上で陽気に踊りながら、答えた。
「ええ、大ありです。お嬢様」
「なぜ、私の事を『お嬢様』って呼ぶの？」
「それは言わなくとも、お分かりでしょう」
「分からないよ」
「……そうですか。まあ、いいでしょう。とにかく、あなたはこのような所で眠られる御方ではありません」
「どうして？」

ピエロは「ふう」とため息をついて、困った様子で言った。
「あなたはこのような所で死ぬような御方ではないと言っているのです。あなたは偉大なるお父上の血を受け継ぐ人なのです」
「私のおとうさん……？」
「そうです、私はあなたのお父上に仕える者です。さあ、そろそろ、お目覚めの時間ですよ……」
ピエロはパンパンと手を叩いた。

気がつくと、そこはもう暗い部屋ではなくて、白い部屋だった。
明かりもちゃんとあったし、ベッドも真っ白で、やわらかくて気持ちがよかった。
ただ、私の身体中に、何本もの管がさし込まれていた。
ベッドの周りにはたくさんの電子機器が並んでいた。ピッ、ピッ、と音を立てている。
「どこだろう……ここ」
私は自分の身体を縛っている管を無理矢理、引き抜いて立ち上がった。
すると、ブザーが忙しく鳴り始めた。やがて、白衣を着た複数の人間が現れて、私をベッドに戻した。
一人の医者らしき男が、私の胸に聴診器をあてた。

「まだ、安静にしていて」
「はあ……あの……ここ、どこですか？」
「こ、ここかい？　し、心配しないで。病院だよ」
「そうですか……」
病院と答えるだけなのに、なぜか、その男はうろたえている。
そして、ベッドの向こう側では、この聴診器を持った男と、一緒に部屋に入ってきた医者達が、激しく口論していた。
「これはどういうことだ！　軍上層部の連中は目を覚まさないと言っていたはずだぞ！」
「落ち着いてください、部長！　あの……一年前に起こった海峡爆破事件……唯一の生存者とはいえ、相手は普通の女子高生ですよ。危険には値しませんよ」
「君は、あの事件を知らんから呑気でいられるのだ！　ちっ、長官はあんな危険人物を我々に押し付けてどうするつもりなんだ……私達はただの医者だぞ！　もし、何かあったら……」
「部長！　聞こえますよ……」
しばらく、口論したあと、医者達は部屋から出て行った。
入れ替わりに、看護婦が入ってきて、私を白いツナギのようなものに着替えさせた。

着てみると分かったけど、なんか拘束具にも見える。
「これから、検査をしますからね」
「あの、ご飯、食べちゃダメですか？」
「あ、ごめんね……。検査、終わってからね」
私はぐうぐう鳴るお腹を抑えて、看護婦について行った。
眠っていた病院らしき建物はとても、大きかった。
廊下の窓からは中庭が見えて、警備員のような人達がライフルを持って、庭の見回りをしていた。
なにやら、この建物はとても厳重に守られているというか、中から人が逃げ出さないように警備員が目を光らせている。
私は警備員を指差して、看護婦に訊いてみた。
「あの人達が持っているのは、本物ですか？」
看護婦は顔を引きつらせて笑っただけで、何も言わなかった。
私が連れてこられた部屋は、窓一つない密室だった。あるのは机と椅子が二つ。
なんか、刑事ドラマとかで見る取調室みたい。
「もう少ししたら、先生、来ますから」
そう言って、看護婦は逃げ去るように部屋を出て行った。

看護婦は出て行く時、ドアの鍵を閉めた。
私は一人そこに閉じ込められた。
「ふう」とため息をついて、椅子に座った。
「私、どうなるのかな……」
気がつくと、涙を流していた。
先輩……。私、一人だよ……。負けちゃうよ。生きていけないよ。
助けて、先輩！
「いけませんねぇ、泣いてばかりでは……」
目の前を見た。そこには夢の中の〝暗い部屋〟で見たピエロが部屋の壁にもたれかかっていた。
ただ、〝暗い部屋〟で会った時とは違って、私を遥かに越える二メートルもの背丈だった。
「せっかく、眠りから起こしてあげたというのに……これでは、バカな人間どもの言いなりですよ」
ピエロは肩をすくめた。
「なんで、あなたがここにいるの？」
「……そんなことはどうでもいいのです。あなたは現状をよく理解していらっしゃらな

い」
「じゃあ、ピエロさんは知ってるのね？　ここはどこなの？」
　ピエロは椅子ではなく、机の上に座り、答えた。
「ここは東京……日本政府お抱えの軍事施設ですね……そして、あなた。お嬢様は囚われのお姫様ということです」
　東京と聞いて、私は驚いた。
「東京！　ここは九州じゃないの？」
「ええ、残念ながら……。あなたは知らない。あの日から、一年経ったのですよ。憶えていますか？　あの、暑い夏の日を」
　突如、私の頭の中にフラッシュバックのように、記憶が散り散りになって降ってきた。

1—3

「先輩！　頑張って、あと、一周だよ！」
　私はストップウォッチを持って、先輩が戻って来るのを待った。
「ひゃ～、疲れた。どうだった？」
「すごい！　五秒も縮みましたよ」
　マネージャーである私は先輩一人だけの練習につき合わされていた。
　先輩は私に渡されたタオルで汗を拭きながら言った。
「たった、五秒かよ」
「なに、言ってるんですか！　陸上の五秒は、普通の五秒とは訳が違うんですよ」
「でも、俺って長距離だぜ」
「いいの、いいの」
　私は景気づけに先輩の背中をバシッと叩いた。
「いってぇ！　なに、すんだよ。お前、バカ力だな」
　私と先輩は誰もいない高校のグラウンドを出た。
　外はもう真っ暗で、道の街灯がともり始めている。

「わりぃ、こんな遅くまでつき合わせちまってさ」
「いいんですよ。それより、秋の駅伝、頑張ってくださいね」
「お、おう！」
　先輩はスポーツバックの中に手を入れて、何やらガサゴソとしている。
「なあ、真帆。あ、明日さ、これ、一緒に行かないか？」
　先輩が差し出したのは海峡で行なわれる港祭りのチケットだった。
「え、港祭り？」
「うん、花火大会があるんだ」
　先輩は顔を赤くして、私と目を合わせずに答えを待っている。
「先輩！」
「え、なに？」
「なに、じゃないですよ！　こういうことは相手の目を見て言ってください！」
　私が頬を膨らませていると、いきなり先輩が私の両肩を掴んだ。
　急だったので、私まで顔が赤くなるのを感じた。
「真帆、明日、俺と花火大会に来てくれ！」
「は、はい、喜んで……」
　次の日、私は珍しく朝早くに起きた。

お昼に家の近くにあるソバ屋で軽く昼食を済ませて、友達の家に行った。
そこで友達のお母さんにおろしたての浴衣を着付けてもらった。
友達が「これ、貸してあげる」ってルージュとグロスを差し出した。
私が「口紅なんて似合わないよ」と言ったら、「なに、言ってんの。今どき、小学生だってするって。大丈夫、私が塗ってあげるから…」と説得された。
普段、リップクリームも塗らない私の唇に、薄いピンク色のルージュが塗られていく。
友達が塗っている最中、「先輩、真帆のピンクの唇見てキスするかもよ」と私をからかった。
私はその場では怒ったふりをしたけど、心の中では本当にそうなるかもしれないとドキドキした。
「はい、出来たよ」
友達がニヤニヤ笑いながら、鏡を持ってきてくれた。
「ねっ、かわいいでしょ」
私はピンクの唇を見て、なんだか嬉しくなってきた。

八歳になった誕生日の日、死んだお母さんが「可愛くなるおまじない」と言って、私にルージュを塗ってくれた。

私はそれを思い出しながら、鏡に映った自分の唇にうっとりした。
「あんた、ナルシスト？　自分ばっか見てないで、さっさと先輩、落としてきなよ」
友達はそう言って、私の背中を強く叩いた。
私は友達の家を出たあと、コンビニでインスタントカメラを買ってから、海峡へと向かった。
もう空は夕日で赤くなっていた。私は海峡に近くなってくるにつれて、胸がドキドキしてくるのを感じた。
海峡に着いて、しばらく先輩を待ったが、なかなか先輩は現れない。
先輩が遅いので、私はぶすくれて、屋台でかき氷を買った。
「なによ、自分から誘っておいて！」
私はやけくそになって、冷たいかき氷を一気に食べた。
無理して食べたので頭がすごく痛い。
「いててて……」
私はおでこを手で押さえながら、空を見上げた。
「あれ……」
さっきまで、夕日で赤くなっていた空が、真っ黒な雲で覆われている。
「雨、降るのかな……」

ふと、海峡の方に目をやると、そこには大きな真っ黒な巨人が、こっちを睨んで立っていた。

そして、巨人が地鳴りのするような咆哮をあげると、海峡全体が金色の光りに包まれて、辺りにいた人たちはみんな、叫ぶ暇もなく消えていった。

私も消えてしまうのかな……。

そう思った瞬間、私は白い大きな翼にすっぽりと全身を覆われていた。

いや、守られていたと言うのが正しいのかもしれない。

気づいた時、私はそこだけ抉り取られたような荒地に立っていた。

1―4

「思い出されましたか？」
　ピエロは窓のない壁を見つめていた。
「うん……少しだけ……でも、あの日、海峡で何が起こったの？　な、何か、恐ろしいことが起こった気がする……」
　ピエロは私の目を見つめた。
　私もピエロを見つめ返したが、彼の両目のただの暗い穴で、そこから何かを知ることは出来ない。
「人間が都合のいいように記憶を改竄するという事は本当だったのですね」
「どういう意味？」
　ピエロは何も言わず、机から下りた。
「今は語る暇がありません。とにかく、あなたはこの施設から逃げてください」
「逃げるって、どうやって？」
「私が活路を開きます」
「でも、私、逃げてどうするの？　東京に知り合いなんていないよ。それに……それに先

輩だって、もしかしたら、あの〝光り〟で……」
「先輩、先輩ですか……。いいでしょう、あなたに一つ、いい情報を教えます。あなたの先輩は生きています」
「せ、先輩が……本当なの?」
「ええ、確かに……。あなたはこの施設を出たあと、猫を探しなさい」
「猫?」
「会えば分かります。では、始めましょう」
ピエロは指を鳴らした。
その瞬間、頑丈な壁に大きな穴があいた。
「では、よしなに。お嬢様」

私はピエロのおかげで簡単に施設から逃げ出せた。
久しぶりに感じた陽射しは、とても気持ちが良かった。
私は渋谷に来ていた。
テレビでしか見たことのない人ごみにもまれて、意味もなく歩き続けた。
次第に、お腹から聞こえる『ぐうぐう』という音は激しくなってきて、私は今にも倒れそうになった。

私は道端に座り込んで、休憩することにした。
田舎育ちの私には都会の空気がとても重くて、苦しかった。
それに、あまりの人の多さに、立っているだけで吐きそうになった。

私がボーっと、座り込んでいると、一匹の小さな青い子猫が現れた。
「お姉ちゃん、おなか、すいてるの？」
耳元で可愛らしい子供の声が聞こえた。
でも、辺りには誰もいない。いるのは私と子猫だけ。
「ねえねえ、おなか、すいてるんでしょ？」
「ね、猫が喋ってる……」
「ボク、ペータン。ハーク様の部下だよ。ハーク様がいつも困っている人を見つけたら、助けてあげなさいっていうんだ。特に、ボク達のような仲間、魔族をね」
「魔族？」
「そうそう、お姉ちゃんも仲間だよね」
「私が……仲間？」
「いいから、ついて来なよ。ハーク様に会わせてあげるかさ」
私は人間の言葉を話せる不思議な猫について行った。

ピエロの言っていた猫とはこの子のことだろうか？
しばらく歩き続けて、着いた所はごく普通のファーストフードの店だった。
青い子猫、ペータンは自動ドアをぬけ、店の中へと入っていった。
私も戸惑いながら、ついて行く。
ペータンはカウンターの前に来ると、カウンターの上へと飛び乗った。
「よう、ペータン。ハーク様に用か？」
「うん、仲間、仲間！」
店員は私とペータンをカウンターの奥へと案内してくれた。
奥には大きな冷蔵庫があった。
店員が「よいしょ」と言って、ドアを開く。
冷蔵庫の中に冷凍食品はなかった。代わりに狭い小さな部屋がある。
「エレベーター？」
冷蔵庫はカモフラージュのようだ。
なんで、隠す必要があるんだろう……。
まるで、映画で見たマフィアの隠れ家みたい。
「ペータン、粗相のないようにな」

そう言って、店員はカウンターに戻っていった。
私とペータンはエレベーターに乗り込んだ。
中にはボタンがたくさんあって、私がどれを押していいのか迷っていると、ペータンが教えてくれた。
私はペータンの言った通りにボタンを押していく。
エレベーターはパスワードを入れないと動かない仕組みになっているようだ。
ガクンとエレベーターが揺れて、動き出す。
かなりのスピードで降下しているため、私は立っている事が出来ず、床に膝をついてしまった。
やっとのことで、エレベーターが止まって、エレベーターを降りると、廊下には武装した警備員が二人立っていた。
そこで、私達は制止される。
「パスを確認……って、ペータンか。ハーク様ならモニタールームにいるよ」
「うん、ありがと。今度、サンマ持ってきてあげるね」
「マジかよ。ついでに、シャケも持って来てくれよ」
奇妙な会話を交わす警備員の頭には、猫のような縦耳が二つ。
ほっぺには左右に横に伸びた長髭が生えていた。

警備員に言われたとおり、長い廊下を抜け、モニタールームに入ると、そこは機械だらけの大きな部屋だった。
地下とはいえ、とても小さなファーストフード店の敷地のものとは思えない。
部屋は全体が大きなモニターで囲まれており、中心には指示席がある。
その構造は戦艦のブリッジを思わせる。
十人以上もの人間……ではなく、先ほどの警備員と同じく猫人間が、複数のモニターとにらめっこをしていた。
モニターには東京のありとあらゆる場所が映し出されていて、常に監視を怠らない緊張感が伝わってきた。
「ハーク様、困っている仲間を連れてきたよ」
「うむ、ごくろうじゃったな」
指示席に座るハークは振り返ろうとせず、モニターを見つめている。
かなり背の低い人なのか、椅子からそのうしろ姿は見えない。
「あの……ここはどこですか?」
「ここは東京都内……いや、日本全国が見渡せる巨大監視施設。そして、ハーリー社改め、ハーリー族の日本支部じゃ」
「え?」

「物分りの悪い子じゃな」
ハークはやっと、椅子から下りて私の方を見た。
私は目を疑った。
目の前に立っているのは白い軍服を着た小さな猫だった。と言っても、ペータンと違って二足歩行ができるようだ。
そして、無様にも二頭身である。
その姿はぬいぐるみに等しい。
「わしがハーリー族、族長。ハーク・フォゼフィールドじゃ」

第二章　俊介

2―1　2―2　2―3

2―1

目が覚めると俺はどぶ臭い川の中にいた。

素っ裸で月の光りに照らされながら、川から上がり、ゴミ捨て場から破れた服を見つけてそれを着た。

服は予想通り、とても臭かった……。

が、気にせず、冷えたアスファルトを歩く。

それから、何も考えずに歩いた。時間も、人も、気にせずにただひたすら歩き続けた。

俺はこれからどうすればいい？

生きたって仕方ないのに……。こんなにボロボロになって歩いても仕方ないのに……。

アイツだって……アイツだって、あの〝光り〟に巻き込まれたに違いない……。

「ちくしょう……」

二週間ほど、歩いただろうか。

俺は東京に来ていた。
メシを食わずに歩き続けられるのは、この呪われた身体、心臓……いや、心のせいか。
償っても償いきれない過ちを犯した。
俺は信じていた親友の肉を……心臓を食べた……。

2—2

俺の手に握られていたのは今日、海峡で行われる港祭りのチケット。
今日はアイツと、デートか。
普段ジャージしか着ないので、姉貴から「あんた、女の子に会いに行くんだから、もっとマシな格好してよね」と言われ、あれこれ着せられた。
いま流行りの服らしい。
家を出たのはいいものの、俺は熱血根性を捨てきれず、海峡に行く前に高校に寄ってグラウンドでランニングを始めた。
「駅伝、優勝できるかな……」
走っていると何もかも忘れられる。
とても、気持ちがいい。
しばらく走っていると苦しくなるが、その苦しみを乗り越えれば、頭がポワーンとして麻薬の幻覚症状みたいになる。

ランナーズハイとかいうやつだ。

俺が走り出したのは、小学六年生の時だ。初めて走ったのは父さんと母さんが死んだ日。

葬式で泣き崩れる姉さんを残して、俺は会場から逃げ出し、必死で走った。

父さん、母さん。俺、ちゃんと、走ってるよね！　頑張ってるよね！　前に進んでるよね！

今でも、その時の声が頭から離れない。

「そろそろ、時間か……」

グラウンドの裏で汗臭いシャツを脱ごうとした時、校舎の方からガラスの割れる音がした。

俺は着替えるのをやめて、校舎の方に向かった。

中庭には窓ガラスの破片と黒い塊りが落ちていた。

近づいてみると、それはグロテスクな化け物の首だった。

「うわぁっ！」

俺は抑えきれずにその場で吐いた。

吐いている間、頭上から悲鳴があがった。

その直後にまた、黒い塊りが上から降ってきた。

今度は巨大な腕だった。
「なんなんだよ!」
俺は訳も分からず、校舎に入って向かい土足で階段を上っていった。
不気味な肉塊が降ってきた教室を探す。
激しい胸の音を抑え、一気に扉を開いた。だが、一つ目、二つ目の教室には誰もいなかった……。
そして、三つ目の教室、理科室にそいつらはいた。
教室の中には一人の金髪の少年と、化け物が五匹いた。
化け物達は見たことのないようなデコボコした奇形の顔を持っている。
それに対して金髪の生徒は、白い肌に蒼い瞳を光らせている。
手には古ぼけた青銅の槍がある。
「ショーン!」
「俊介?」
俺が呆然と立ち尽くしていると、一匹の化け物が俺に襲い掛かってきた。
「ふせろ!」
叫ばれて俺は言われたとおりに、床に身をふせた。
間一髪で、青銅の槍が化け物の脳天を突いた。

古い槍とは思えないほどの威力で、化け物の頭が一気に吹き飛んだ。
「大丈夫か！　俊介」
「ショ、ショーン……」
金髪の生徒、ショーンは俺の幼なじみだ。
ちょうど、俺の父さんと母さんが死んだ次の日にアメリカから転校してきたハーフの帰国子女だ。
とてもいいヤツで、両親のいない俺に優しくしてくれた。
見た目は外国人だから、俺も最初は戸惑ったけど、徐々に打ち解けあって、今では親友と呼べる仲だ。
しかしなぜ、ショーンが……。
「理由はあとで話す！　僕が突破口を開くから、一気に突き進むぞ！」
「つ、突き進むって、ここは三階だぜ。さっきの化け物みたいになりたくないよ……って、まさか……」
「そのまさかだよ」
ショーンは俺を引き連れて、化け物に突っこんで行った。
一匹の化け物は簡単に右腕を吹き飛ばされ、二匹目は無残にも串し刺しにされ、最後の一匹はショーンのジャンプ台代わりに踏み潰された。

ガラスを突き破って、宙に飛ぶ。俺は怖くなって、目を塞いだ。
目を開けると、グラウンドに戻っていた。
「ショ、ショーン。こりゃ、一体どういうことなんだ！」
「僕もよく分からないんだけど……奴らに追われているんだ。いや、狙われているのが正しい言い方かな？」
「かな？　じゃねぇよ！　なんで狙われてるんだよ！」
「一つだけ明確なのは、化け物達が僕の肉を求めているということさ」
「肉？」
「そうだ……僕の父さんの……魔王の心臓だ」
俺とショーンが話している間にも、さっきみたいな不気味な化け物がウジャウジャ出て来た。
口を裂けるほど開いた化け物が、黒い翼を広げて空から。
ボコっと、音を上げると、黄色の腕がグラウンドの土から。
グラウンドから少し離れたプールの水道管が破裂して、大量の水と一緒に、トカゲのような巨大な化け物が。
俺は様々な種類の生き物……ではなく、化け物に直面した。
「なんだ、こいつら……」

「正に、四面楚歌だな。この見慣れない生き物達は魔族……昔、僕の父さんの部下だった奴らさ」
「お前の、父さんの……」
「僕の父さん、前科千犯はあるよ」
そう言って、ショーンは化け物の群れに飛び込んで行った。
ショーンは強かった……。
槍一本で、次々に化け物達を倒していった。
俺はただ、ぼーっと見ているだけ。
その間もショーンは化け物の周りを駆け回っている。
その戦いは素人の俺から見れば、優勢に見えた。
だが、化け物達の数も半端ではない。
数匹の化け物が倒されても、また新しい化け物達が現れ、ショーンに休む暇を与えなかった。
やがて、一匹の化け物が空からショーンに向けて、一本の銀の矢を放った。
矢は右足に命中し、ショーンはバランスを崩した。
そして、もう一匹の化け物がその隙を狙って、ショーンの懐に飛び込み、ショーンの左腕を食いちぎる。

思わず、ショーンの顔に苦悶の表情が浮ぶ。
「ショーン！」
俺の叫び声がスイッチとなったのか、化け物達が一斉にショーンへと襲い掛かった。
「ぐわあ！」
ショーンの悲痛な叫び声が響き渡る。
大量の血液が体内から吹き上げた。
化け物達はカラスがゴミ捨て場で、エサを貪るようにショーンの肉体を貪り、辺りに肉塊をばら撒いた。
俺がもうダメだと思った時、ショーンから眩しい光りが一閃した。
周りにいた化け物達が金色の光りに覆われる。
瞬間、化け物達は瞬く間に消え去った。
金色の光りは更にグラウンド全体を覆い込み、化け物達を全て呑み込むと、空高く天へと昇っていった。
俺は慌てて、ショーンのところへ駆け寄ると、彼の変わり果てた姿を見て言葉を失った。
「しゅ、俊介……」
彼は全身を化け物達に食いちぎられ、もう既に首と胴体しかなかった。

だが不思議と生きている。
「ショーン！」
俺はショーンを抱きかかえた。
「俊介……僕はもう……。頼む、僕の頼みを聞いてくれ」
「な、なんだ？」
「ぼ、僕の心臓を食べてくれ」
冗談を言っている余裕はない。
ショーンは真剣な眼差しで俺をしっかりと見つめている。
「そ、そんなことできるかよ！　なに言ってんだよ」
「俊介！　時間がないんだ……頼む。僕の心臓が……この恐ろしい力が魔族の手に渡るのは嫌なんだ……いや、ダメなんだよ。そんな汚い奴らに渡されるより、お前に……信頼できるお前に……大好きなお前に、僕の心臓を食べて欲しいんだ」
気がつくと、俺は涙を流していた。
「ふざけんなよ！　俺達、まだこれからじゃん。お前を絶対死なせるかよ！」
「俊介……ありがとう。だが、もう時間がない。新たな化け物達が直ぐにやってくる。そうなれば、この町は、僕達が育ったこの町は……」
「クソ、クソ、クソ！」

俺はもう、何もできないのかよ！
涙を拭いて、ショーンを抱き上げた。
「ショーン、俺たちの町を見てくれよ」
微笑を浮かべて、グラウンドから見えると海峡と夕焼けで赤く染まった海を眺めた。
「ああ、本当にきれいだ……。すまない、俊介。僕は君に黙っていたことがある。実は僕も『あの子』のことが……」
言いかけて力尽きた。
「ショ、ショーン！」
俺は必死に彼の身体を揺さぶった。
だが、ショーンの身体は俺の腕の中で徐々に冷たくなっていく。
「ショーン、ショーン！」
ふざけやがって！　何が魔族だ！　何が魔王だ！
憎しみが俺の全身を駆け回る。
もう、何もかもぶち壊してやりたい。そんな怒りがこみ上げてきた。
海峡の方を見ると、港祭りが始まろうとしていた。
「なんて、初デートだ……」
やるせない思いで空を見上げると、海峡の方に真っ黒な雲が近づいているのに気がつ

いた。
あれは……雲なんかじゃねぇ！　化け物達だ！
「ダ、ダメだ……あそこには『アイツ』がいるんだ」
俺は一度、自分の右手を見て確かめた。
まだ、人間だ……。
もう、アイツとは手をつなげないかもしれない。会えなくなるかもしれない。
でも、それでもやらなきゃ、アイツをこの町を守んなきゃ全てが終わってしまう。
俺は……今日からバケモンの仲間入りだ。
しかも、とびきりのバケモン、魔王。
「すまない……」
冷たくなりかけたショーンの胸の中にに手を入れる。
それから後の事はよく憶えていない……。
ただ、アイツのもとへ。
海峡へ行かなければいけないと、ただそう思っていた。
そして、薄っすら記憶に残っているのは……。
大勢の人たちの足音、叫び声、泣き出す子供、それをかばう大人。
みんな、みんな逃げたがっていた。恐がっていた。泣いていた。

そして、なぜか、俺も寂しそうに泣いていた……。

2—3

東京は本当に人だらけだった。

この街に来た理由は人が多かったかもしれない。

見知らぬ人でも、大勢に囲まれているとなぜか心が休まる。

俺は渋谷にいた。

ボロボロの服で都会を歩いていると必然的に白い目で見られる。

でも、そんなことはどうでもいい。

俺は小さな公園に入り、蛇口から水をがぶ飲みした。

水を飲んでいると、傍にいた子供達がみんな逃げ出した。

フン、魔王に相応しい光景だな……。

飲み終わって、振り返ると子供達が逃げ出した理由が分かった。

そこには俺より汚い、ミノムシのように藁を体に巻いた爺さんが立っていた。

「ふぉふぉふぉ、魔王様。お初にお目にかかります」

その爺さんは不気味に笑っている。

よく見ると、その黒い目からはウジが湧いていた。

「てめぇ、魔族か」
「いえ、正確には妖怪ですな」
「んなことはどうでもいい。殺されたくなかったら、さっさと失せろ」
俺は爺さんを無視して、その場を立ち去ろうとした。
「……お待ちくだされ」
「なんだよ、お前らバケモンはこの心臓が欲しいだけなんだろ？」
俺は振り返って、自分の胸を叩いてみせた。
「四の五の言わずに、掛かって来いよ」
そう言うと、妖怪は笑った。
「我ら、悪名高き妖怪と言えども、そのような大それたことはしませぬ。我らの望むことは一つ。大いなる力の共存、または融合。つまり、あなた様の、魔王様のお力を借りたいのでございます」

第三章　青山

3—1　3—2

3—1

僕は師匠に書いてもらった符を取り出し、迫り来る化け物に向けて投げつけた。
符が化け物の肩に貼り付くと爆発した。
辺りに不気味な緑色の血が飛び散る。
「月花(げっか)の名の下に枯れ果てるがいい……」
僕は指を宙に絵を描くように動かし、術を発動させた。
「月花陣(げっかじん)」
化け物の周りに円陣が引かれ、宙に浮ぶ。
その円陣の中にはきれいな桃色の花が描かれている。
その花の名は月花……。
それを見たものは、美しい花の魔力によって呪われ、死に至るという。
「月花はその美しい外見とは裏腹に恐ろしい力を持っている……お前も、その美しい花に見とれて死ぬがいい」

人差し指を一直線に振り下ろす。

「陰！」

化け物は一瞬にして灰と化した。

僕は背後から邪気を感じ、振り返った。

森の奥からはまだ化け物達の邪気が感じられる。

先日、降った雨で土は泥濘となっている。

化け物達にとって好都合でもあり、住みやすい場所なのだろう。

僕は怯むことなく、前へと進み始めた。

3―2

とても暑い夏の日だった。

僕はやっとのことで警らを終え、急いで署に戻って着替えを済ませた。

ロッカーから携帯電話を取り出して、電源を入れた途端、ベルが鳴った。

電話をかけてきた相手は妹のくるみだった。

今日はくるみと港祭りに行く予定だ。くるみは友達と水着を買いに行ったあと、そのまま友達と海峡に行って僕を待っている。

僕とくるみに両親はいない。

正確には、わからない……。

僕は三歳の時に本当の両親に捨てられ、施設に入り十五歳になると、奨学金を得て高校に入学した。
そして、十九歳で警察官になった日、施設から一本の電話が掛かってきた。
それは僕に妹がいるという知らせだった。
また、捨てたんだ……。父さんと母さんはまた子供を捨てたんだ。
僕は何も考えずに、彼女を引き取った。
くるみは八歳。えくぼがとても可愛い子。
僕が施設に引き取りに行った時もニコニコ笑っていた。
小さなリュックサックを抱えて、僕を待っていた。
とてもうれしかった。相手は女の子だから拒絶されるかもしれないと思っていた。
だが、くるみはいつも僕に微笑んでくれる。
例え一緒に育たなかったとしても、本当の兄妹だ。
携帯から「お兄ちゃん、早く来てよ！　花火大会、始まっちゃうでしょ」とくるみに弾んだくるみの声が響く。
急いで署の駐輪場から自転車を引っぱり出し、猛スピードで海峡へと向かった。
もう既に海は夕日で赤く染まっていた。
この景色は毎日、見ているはずなのに、その日の夕焼けはとても印象的だった。

だが、気のせいか、海峡の上には暗雲が昇っている。
「雨かな……でも、天気予報では晴れだったけど」
僕は首を傾げながら自転車を降りた。
会場に設置された即席の駐輪場に自転車を置いてくるみのもとへ走った。
「くるみ、怒ってなきゃいいけど」
そう言いながらも、自分で笑っているのを感じた。
くるみはお土産屋の近くにいると言っていた。
お土産屋はちょうど、小高い丘の上にあって、花火が一番きれいに見える場所だ。
僕は必死に汗を掻きながら、階段を上っていった。
近くの公園にくるみはいた。
「おーい、くるみ」
僕はくるみを呼んだものの、ぜいぜいと荒い息をたててその場で足をとめた。
くるみが僕の声に気づいた。
「あ、お兄ちゃん!」
くるみが振り返ろうとしたその時、海峡の前に巨大な真っ黒な巨人が立っていた。
僕は考えるよりも先に走っていた。
笑いかけているくるみに手を伸ばそうとした。

だが、もう遅かった……。
僕の手が伸びるよりも先に、巨人が大きな口から吐いた金色の光りが海峡の辺り一面を覆った。
光りはちょうど、くるみのいた場所までとどいた。
そして、くるみは一瞬にして、かき消された。
「くるみ！」
あっという間だった。
光りは海峡まるごと、根こそぎ奪っていった。
その直後に、残された人々の悲鳴、その場から逃げようとする足音、大事な人を奪われて悲しむ人の泣き声、それらが一斉に広がると、光りの余波が僕達を襲った。
怒る暇も憎しむ暇も与えられなかった。
ただ、その惨劇に嘆き、泣き叫ぶだけだった。

3―3

目を開けるとまぶしい青空で、耳元で波の音が聞こえた。
僕は波打ち際に横になっていた。
どうやら、流されたようだ。
ゆっくりと身を起こす。
「おはようさん、若いの……」
振り返ると、大きな石の上に一人の老人があぐらをかいていた。
老人は貧弱な身体で、白髪のボサボサとした長い髪に、長髭。
そして、ボロ衣。浮浪者みたいな格好をしている。
「あ、あの、ここは？」
「ここか、儂にも分からんわい……無人島には間違いないと思うが、まあ、あの衝撃から助かったのだから奇跡じゃな」
「そうだ！　海峡は、みんなは、くるみはどうなったんだ！」
老人は首を横に振った。
「残念じゃが、あの光りに当たったら、助かっとらんな」

僕はうなだれて、地面に膝をついた。
「……んな……そんなバカなことあってたまるか！」
僕は思いっきり、砂を叩いた。
「だって、そうだろ！　あ、あの、くるみが死んだって言うのか？　嘘だろ？　いつも僕に可愛い笑顔を見せてくれるくるみが……。まだ、九歳なんだぞ！　ふざけるな！」
僕は名も知らない老人に、どうしようもない怒りをぶちまけた。
老人は黙って僕の話に耳を傾けている。
「あいつだ……あの化け物が、僕のくるみを」
唇を噛みしめる。
「……殺してやる……殺してやるぞ！　一生かけても殺してやる。必ず、自分の手で息の根を止めてやるからな！」
僕の中にはもう、化け物に対する憎しみと復讐という言葉しか残っていなかった。
それだけが今、僕を支えている。
この憎しみを忘れれば、もう立っている事も出来そうにない。
僕が怒りで身を震わせていると、老人が石から下りて立ち上がった。
「ふう……な～んで、儂んとこだけ、こんな奴が集まるかな……。よかろう、お前さんに選択を与えてやる。二つに一つだ」

「え……」
「だから、その化け物を殺したいのだろう？　それを生身の人間が出来ると思うか？　無理無理」
「あんたは知っているのか……」
ため息をついたあと、僕の目をしっかり見つめた。
老人の目には計り知れない邪悪な闇が映っていた。
僕はその恐ろしい目を見て、背中をブルッと震わせた。
「簡単なことじゃ……化け物を倒す方法はただ、一つ……自分自身が化け物になればいい」
老人は僕から目を離さない。
しっかりと見つめている。僕を試しているようにも見える。
「どうする？　儂は、拒みはしない。お前さんが望むなら、その化け物になれる方法を教えてやろう」
僕は一瞬ためらった。
だが頭の中にくるみの笑顔が浮ぶと、憎しみが僕をかりたてた。
「やります！　僕に教えてください。化け物になる方法を！」
「そうか……」

老人は少し悲しそうな顔をして、僕の肩を優しく叩いた。
それが老人に出来る精一杯の慰めだったのかもしれない……。

厳しい修行の毎日だった。
午前は無人島を百周は走り、午後は武術、符術、気術の基本練習。
師匠に与えられた修行が終わっても、自分から進んで修行を絶えず続けた。
朝から晩までつらい修行の連続。
でも、修行をしている間は、くるみのことを思い出すことも、悲しむこともなかった。
僕の師匠となった老人は樹・葉喰（じゅ・ばくらい）先生。
元々、海峡の近くにあった丘の上で静かに暮らしていた仙人様だったのだが、この前の化け物の光りで住む所がなくなったそうだ。
師匠の御歳はだいたい、五百歳くらいと聞いた。
暗黒術、月花流（げっかりゅう）の六代目にして、たった一人の師範である。
「青山よ。儂が教える月花流は暗黒術、正道から外れた邪道にあたるものじゃ。言わば、はぐれもんだ。月花流の元祖は五星流にあった。五星流とは、土、水、炎、陽、そして陰。この五つの力を己の身体にのせることによって、初めて強大な力を使えるようになるのだ。じゃが……月花流は陰、闇の部分だけしか使わぬ。よって使う者自身が呪われ

ていき、朽ち果てる。さて、お前さんはどうなるのかの？」

僕は鍛練を続け、次第にいくつかの術も使えるようになった。

そこで、僕は師匠に訊ねてみた。

「先生、僕は奴に、あの化け物に勝てるでしょうか？」

師匠は何も入っていないキセルを銜えて言った。

「まあ、無理じゃろうな」

師匠の言葉を聞いて、愕然とした。

「そ、そんな！」

「そう恐い顔をするな……。お前さんはこの半年ほど、真面目に儂の修行をこなしてきたし、術もいくつか使えるようになった。じゃが、はっきり言ってお前には精（ジン）が足りん。いや、これは生まれつきのものじゃ。素質じゃよ。じゃから、いくらお前が頑張っても限界があるだろう。その限界があの化け物の力を超えていればいいのじゃが……もちろん、儂は最後までみっちり教えるがな。どうじゃ？　今からでも遅くないぞ。修行をやめんか？」

師匠の話を聞いて、少し落ち込んだけど、それでも修行をやめる気はなかった。

僕の頭には今でも、くるみの笑顔が焼きついている。

あの化け物を殺さなければ、僕は死ねない……。
鬼になってでも、奴を、あの真っ黒な巨人を殺さなければ。
だから、僕は何としてでも、月花流の力が必要だった。
くるみ、見ていてくれ。
お兄ちゃん、必ず仇をとってやるからな。
「先生、僕に精が足りないと言うのなら、修行の量を二倍、いや三倍の量にしてください」
僕がそう言うと、師匠は頭を左右に振って、ため息をついた。
「バカもんが……」

そんなことがあってから、更に四ヶ月が経った。
僕は師匠から月花流の全てを教わり、どうにか自分のものにすることが出来た。
島を出る支度をしていると、師匠が別れのあいさつに来た。
「先生、本当にありがとうございました。このご恩は決して……」
僕がそう言い掛けると、師匠がとめさせた。
「あ～、やめんか、やめんか。虫唾が走るわい。それより、これは餞別だ。持って行け」
師匠から渡されたのは黒いスーツだった。
喪服と言うのが正確かもしれない。

「まあ、縁起の悪い色ではあるが、夜の戦いも多くなるだろうし、それに通気性もいいしな」

僕は師匠に対して、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます！　先生」

「だ～、もう、やめろっちゅうに！」

師匠は信じられないよう事に顔を赤くして、そっぽを向いた。

「それから付け足すようだが、お前さんは今日から、月花流、八十九代目を名乗るがよい」

「な、何故です？　なぜ、僕のような未熟者が……」

そう言うと、師匠は僅かに目を潤ませた。

「月花流は本当に呪われた流派なんじゃよ。儂の所へ来て修行する者達はお前さんのような仇やら復讐やらを生きがいにしとる。儂はつくづく、迷う。お前さんがたに化け物を倒す術を教えても、皆、いずれは見知らぬ土地で敵討ちもできないまま、朽ち果てていく。果たして、それが本当に幸せなのかどうか……。じゃが、お前さん達は放っておけば自殺をしかねん。かと言って、術を教えれば、早死にするしな……じゃから、儂は術を教えた者には必ず、月花流の名を与えているんじゃ。その人間が生きていたということ証明するためにな」

師匠は僕の目を見つめ直して言った。

「青山よ、一つだけ言っておきたいことがある……決して、命の安売りのようなことはしないでくれ。ワシはお前のような人間に幾度も出会い、別れた。そして誰一人として、二度会うことはなかった……」

気がつくと、師匠の目には涙が浮んでいた。

師匠は僕の目をしっかり見つめて、一番最初に出会った日のように肩を優しく叩いてくれた。

「青山（あおやま）　翔太（しょうた）！　お前が今日から月花流、八十九代目だ」

「……先生」

3—4

僕は暗い森の中で五枚の符を宙にばら撒いた。
「剛魔雷象法」
僕が術をかけると、宙にばら撒かれた符が光り、辺りに凄まじい雷が落ちた。
「出て来い！　お前がこの森で人間達を襲って食べていることは知っているんだ！」
叫び声だけが空しく残る。
ダメか。こうなれば持久戦か……。
だが、僕にはあまり時間がない。
多分、ここにいる化け物もあの海峡の奴ではない。
早く、奴を探さなきゃ……。
かと言って、この化け物を放っておけば、また罪もない人間達が襲われる。
あれから一年……僕の復讐はまだ、終わっていない。
僕は死と隣り合わせの危険な道を走っていた。
「ふう……」
ため息をついて、湿った木にもたれた。

木の枝から落ちた滴が、肩にあたる。
師匠からもらった黒いスーツは本当に役立った。
ただのスーツではない。
多分、師匠が僕のことを心配して、スーツに自分の精を念じてくれたんだ。
だから、ちょっとの攻撃ではビクともしない。
それに色が黒というのも落ち着く。なぜだろう……自分の心が荒んでいるせいか。
もう今日は現れないだろうと思い立ち去ろうとしたその時だった。
森の闇から心に直接語りかけるような声が聞こえる。
「なぜ、魔族を殺す……」
僕はとっさに符を取り出して構えた。
「そこにいたのか！　出て来い！　消してやる！」
だが、化け物はそう簡単には出てこない。
「なぜ、魔族を殺す……」
森の闇に身を潜める化け物は同じ台詞を繰り返す。
「なぜだと？　当たり前じゃないか！　お前達、化け物は人を無差別に襲って食べてしまうじゃないか！」
化け物は少し、間を置いてから言った。

「……そんなことが理由か？」
「そうだ！　お前達は無差別に人を食べるだろう！」
「それなら、人間の方がひどいだろう。魔族は人間しか食べない。だが、人間は同種は食べないがそれ以外の種は何でも食べる……これこそ、他種に対する無差別虐殺ではないのか？」
そう言われて僕は一瞬、言葉に詰まった。
今まで、数々の化け物に出会ってきたが、ここまで知能が高いものは初めてだった。
「それをお前達に言われる筋合いはない！」
「矛盾につぐ矛盾だな」
強い風が吹いた。
木の枝が揺れ、辺りに邪気が広がる。
僕はいつでも術をかけられるように構えた。
やがて、風が止むと、「どしん」という音が森全体に広がり、紫の色のドラゴンが現れた。
体長五メートルほど、頭には二本の角、背中には大きな翼。
今まで戦った魔族の中で一番、強そうに見える。
「お前がこの森で人間を襲う魔族か」

「私はヒトを食べたことがない」
　〝私〟という、言葉に僕は驚いた。えらく、上品な魔族だ。
「嘘をつけ！　実際に食べられた人間が何人もいるんだ！」
「それは低級魔族がやったことだろう。私は知らない」
「知っていたのなら、なぜとめない！」
　ドラゴンは鼻で笑った。
「とめる必要がないからだ」
「なんだと！」
「お前は可笑しなことを言う……。自分達、同種の罪は償えないくせに、他種の文句を言うのはどうかと思う。だから、私は同種が生きるために人間を食べても、何の罪も感じない。彼らも生きるために食べているのだ。ただ殺したくてやっているのではない。それはお前達、人間と同じだ」
「同じゃ……同じじゃない！　お前ら、化け物に何が分かる！　大事な人間を……大好きだった人間が殺された気持ちを！　悲しみを！」
　僕はたまらなくなって、符を取り出した。
「結局、戦うか……やはり、人間との関係は幾年経っても変わらんな……。戦うに前に、一つ訊いておきたいことがある」

僕は構えたまま言った。
「なんだ！」
「お前の名は？」
「月花流が八十九代目、青山　翔太！」
ドラゴンは一瞬、驚いた顔をした。
だが、すぐに冷静さを取り戻す。
「そうか……私はドラムだ」
僕はすぐさま、月花陣をかけた。
ドラムに円陣が引かれ、宙に浮ぶ。
そして円に桃色の花、月花が描かれた。
「陰！」
僕が人差し指を一直線に振り下ろすとドラムは笑った。
「懐かしいな……」
ドラムは灰になるはずだった……。
だが、術の途中で円陣は打ち破られ、ドラムは何事もなかったかのように涼しげな顔をしている。
「そ、そんなバカな……」

「やはり、この術は未だに完璧ではないな」
まさか、そんなはずは……。そんなことは絶対にない。
僕はそう思いたかった。でも、目の前にある現実は違う。
月花流の術の中でも、最強と言われる月花陣が、簡単に破られるなんて……。
術をかけられた相手は身動きが取れなくなる。
それに円陣の中は一千度以上もの高熱があるのだ。
月花陣の「陰」を唱えなくても、炎をあげて燃え死ぬことさえあるのに。
「クソ！」
僕は何も考えずに飛び込んで行った。

第四章　ハーク

4―1

私はハークと一緒にモニタールームを出て、廊下の一番奥にある部屋に案内された。
中世の貴族が暮らしていたような豪華な部屋だった。
そこだけが別世界で、アンティーク家具や、ゴブラン織りのソファーが置いてあった。
天井には金色のシャンデリアが吊るされていた。
私は年甲斐もなく、お姫様になったような気がした。
「好きなところに座りなさい」
ぬいぐるみのような小さな魔族、ハーク・フォゼフィールドはソファーの上に飛び乗った。
「そう言えば、まだ、名前を聞いていなかったな」
「あ、ごめんなさい。私、倉石（くらいし）　真帆（まほ）です」
ハークは頬から左右に伸びた長髭を触りながら言った。
「ほう、いい名前だな。ところで、わしのことを誰から聞いたのかね？」
「はい、私もよく分からないんですけど……なんか、ピエロの格好をしている人が、猫を

探しなさいって」
　そう言った瞬間、ハークの顔が険しくなる。
「ピエロじゃと……ヤツも日本に来ていたのか。……何を企んでおる」
「あの、ピエロさんとはお友達なんですか？」
　ハークはその小さな姿から想像も出来ない、恐ろしい獣の目をした。
「わしがヤツとお友達？　ふざけたことをぬかすな。あんな卑怯で残酷で冷血な男を誰が、友と呼ぶ？　天と地がひっくり返っても、手は組まん」
　ハークは不機嫌そうに、ソファーから下りた。
「す、すみません……私、何も知らなくて」
「いや、いいんじゃよ」
「本当にごめんなさい……。あの、ペータンが言ってたんですけど、私のことを仲間だって……魔族だって……本当ですか？」
　ハークは顎をボリボリと掻きながら、言った。
「本当ですかと言われてもな……そりゃ、間違いないじゃろう」
「え！　そうなんですか？」
「うむ。おぬしの体からは、わしらと同じ、魔族の匂いがプンプンするからの」
「プ、プンプン……」

私もいずれ、さっきの猫人間のように、頭から縦耳が生えてくるのだろうか、と不安に思った。

「じゃが、正確には半分じゃ」
「半分ですか？」
「ああ、おぬしは多分、魔族と人間とのハーフじゃ」
私はそう言われて、少しほっとした。
でも、そこで一つの疑問が頭に浮ぶ。
私の死んだ母さんにはネコのような縦耳も、お尻にしっぽだって生えていなかった。
じゃあ、私のお父さんが魔族なのかな？

私はこの世に生まれてから、お父さんという人に会ったことがない。
生前、母さんは私が生まれる少し前に、交通事故でお父さんは死んだと言っていた。
私が顔をしかめて悩んでいると、ハークが笑った。
「まあ、そう悩んでも仕方ないじゃろう。そう言えば、おぬし、腹が減っていないか？」
ハークに言われた通り、私のおなかはさっきから、危険信号が鳴りっぱなしだ。
「は、はい。めちゃめちゃ、へってます」

ハークは「かかかっ」と笑って、内線電話に向かって食事を持ってくるように指示した。

五分も経たないうちに、また例の猫人間が部屋に入ってきて、トレーをテーブルの上に置いた。

トレーには猫のマークの銀紙に包まれたハンバーガーとジュースがのっていた。

「さあ、食べなさい。ジャンクフードじゃが、これがなかなか美味いんじゃよ。うちの新商品の〝超サンマバーガー〟じゃ」

ハークは銀紙を破って、美味しそうにハンバーガーを頬張っている。

私も我慢できなくなって、〝超サンマバーガー〟なる物を食べてみた。

少し臭みはあったが、あぶらののったサンマがいい味を引き出していて、けっこうイケる。

「あの、訊いてもいいですか?」

ハークはハンバーガーをポロポロ、膝に落としながら、私の方を見た。

「なんじゃ?」

「ハークさんって、ネコ科なんですか?」

彼は肩をブルブルと震わせたあとに、まだ口の中に入っていたハンバーガーを唾と一緒に飛ばしながら怒鳴った。

「誰が猫じゃ！　わしをあんな下等な生き物と一緒にするな！　わしはこれでも、ハーリー族の始祖でもあり、百八魔頭（ひゃくはちまとう）の一人にして、五大魔神じゃぞ」
「百八魔頭って……何ですか？」
ハークは持っていた食べかけのハンバーガーをテーブルに置き、ジュースで流し込んでから言った。
「百八魔頭というのは、先の〝マザーの戦い〟で生まれた称号じゃ」
私は耳慣れない言葉に首を傾げた。
「〝マザーの戦い〟？」
「……話が長くなるぞ」
「はい、お願いします」
ハークは椅子に座りなおしてから、話を始めた。

4—2　4—3

4—2

マザーとは、わしらが生まれた母なる大地。即ち、地球のことを指す。
わしは今の地球のより、四つ前の地球で生まれた。
ああ、四つ前というのは、わしが知っているだけでも、地球は四回崩壊したということじゃ。
地球と言うものは死なない〝生き物〟なんじゃ。
何度壊れても、時間をかけて蘇る。
蘇るたびに新しい生命が生まれた。
で、地球が崩壊した理由というのは……今のおぬし達、人間がやっていることとそう大して変わらんことじゃ。
それは愚かな戦い……戦争。
身勝手な理由の戦争じゃよ。
繰り返される戦争によって、地球は何度も崩壊した。
じゃが、地球がそれで無くなることはなかった。

わしが生まれた時にはもう、その戦いは始まっていた。
戦いが始まったきっかけは、醜い勢力争い……。
それは繰り返し、繰り返し、数え切れないほど続いた。
そして、わしもその愚かな戦いに参戦する時がきた。
この愚かな戦いにおいて、皆、それぞれの理由、野望、夢を抱いて戦場に出た。
次第にそれは膨れ上がっていき、やがて、皆、同じ夢ができた。
それはこの地球……マザーの支配。
皆、それだけを望み、夢抱いて、己の拳を振り上げた。
じゃが、わしの戦う理由は違った。
わしには別の理由があったのじゃ……。
それは大切な者を守るため、一族の存亡を賭けての大戦争じゃった。
そう、これが〝マザーの戦い〟だ。
この頃になると、強者の数も絞られてきた。
百八の魔族の長が厳しい戦いに勝ち残り、いよいよ、長きに亘った戦いも終止符が打たれようとしていた。
果てしない戦いじゃった……。
わしも、大切な者を守るために、この戦いに身を投じた。

やがてはその大切な者も失い、訳もわからず、ただ、ひたすらに戦い続けた。
気がつけば、わしの走った道には無数の屍だけが残った……。
そして、ちょうど、今の地球より、一つ前の地球。地球世紀、アース・００４５にこの地球、マザーはある魔族の男が手にしたのじゃ。
その男の名はタイガ……。
タイガはどこから来たのかも分からない、得体の知れない男だった。
噂によれば、異星から来た者だという。それに、彼は百八魔頭でもないのじゃ。
それは本当に流れ星のように現れたのじゃ。
泥沼化した戦いも、彼によって、やっと終わった。
そして、マザーの王となったタイガは百八魔頭からわしを含め、五つの魔族から幹部を選んだ。
名は五大魔神という。
わしはそれらをまとめる者、魔神長になり、二度とあのような戦争を起こさないように努力した。
タイガは謎が多い奴だったが、根は優しく、争いごともあまり好きな方ではなかった。
その姿はたくましい大きな背に真っ白な翼、何か、虎のような金色の覆面兜を被っていた。

今、思えば、変な格好じゃったな。じゃが、その時は神聖に見えた。
まるで、神のように見えた。
わしも彼が戦うところを見たことがないのじゃが、噂では剣を一振りするだけで、広大な大地がいとも簡単に割れ、火の海が溢れ出し、地球は地獄と化すという。
だが、そんな恐ろしい噂もあれば、こんな噂もある。
彼の歩いた足跡からは美しい花が咲き、様々な生き物に福音をもたらすという。まあ、これは噂と言うか、伝説じゃな。
わし達、五大魔神も次第に、彼を信頼していき、また彼もわしらを好いた。
そして長い間、いがみ合ってきた百八魔頭もお互い、助け合って生きていこうという考え方が広まっていた時、突然、タイガがいなくなった。
その姿がまるごと、行方不明になってしまった。
わしら、五大魔神は必死になって、タイガを探した。それこそ、地球を何回、回ったことか……。
だが彼の姿は見つからなかった。
そんなことがあった直後、自分こそが真のマザーの王と名乗る男が現れた。
それが魔王、ロンゼ・ブリードじゃ。
奴は元々、百八魔頭の一人じゃった。百八魔頭の中でも、それほど目立たず、タイガ

が現れる前の戦いで、大きな痛手を受け、次第にその勢力も衰えていき、一族の滅亡の危機にまで直面したのじゃ。

しかし、奴は何かにとり憑かれた様に凶変した。

その時から、隠されていたカリスマ性が露になったのじゃ。

奴は旧タイガ派に反感を持つ残党を集めてその勢力を一気に伸ばし、わしらに立ち向かい、王座を狙った。

その力は尋常ではなかった。

奴はたった、五日で地球の三分の一を支配下に入れた。

当然、わしら、五大魔神も黙っておるわけはない。奴を倒すために力を合わせた。

魔王ロンゼの出現により、それまで、穏和になっていた百八魔頭の連中にも再び、争いが生じ、旧タイガ派と魔王ロンゼ派に勢力は二分化し、第二の〝マザーの戦い〟が始まった。

当初、わしらは苦戦していた。

奴が自己開発した恐ろしい兵器、〝悪魔の蓄音機〟によって、地球は地獄の炎に呑み込まれていったからじゃ。

じゃが、わしらも決して諦めなかった。いつの日か、タイガが帰ってくることを信じて……。

そして、ロンゼの〝悪魔の蓄音機〟によって、地球はかつてない崩壊が始まった。

わしが今までに見たことのない、とても恐ろしい光景じゃった。
緑は枯れ、海は干からびて、大地はマグマに埋もれた。
全てが最悪のシナリオになってしまったのじゃ……。
これには、魔王ロンゼも驚いた。
多分、計算外の出来事じゃったのだろう。
自分が作った兵器の予想外の破壊力に怖気づいたのじゃ。
そして、自ら王座への野望を捨て、逃げる事を選択した。
当時、一番弱く勢力もなく、低知能だった種族。
ロンゼは猿族を騙し、不思議な箱舟に彼らを乗せて、燃え上がる地球から奴は逃がした。
そう、奴は逃がす事と引き換えに、猿族とある約束をしたのじゃ。
それは奴の心臓を一匹の猿の体内に埋め込むこと……。
つまり、奴は猿に成りすまして、〝マザーの戦い〟から離脱したのじゃ。

わしらは業火の中、残された仲間達と一緒に死を覚悟した。

その時だった。行方不明だったタイガが空から舞い降りたのじゃ。
タイガは焼け野原に足を下ろすと、白い大きな翼をはばたかせた。
強い大きな風が地球全体を駆け巡った。
すると、驚いたことに、あっという間に炎という炎が消え去ったのじゃ。
そして、タイガはわしらにこう言った。
「戦いほど、無益なものはないな……」
そう言って、タイガは地に倒れた。
やがて、彼の身体は荒れた大地に埋もれ、そこから小さな芽が生えた。
その芽はすくすくと育ち、大きな樹となった。わしらはその樹を〝タイガの樹〟と名づけた。
わしは、タイガが地球と……マザーと一体化したのだと思う。
それから残された……いや、助けられたわしらは誓った。
もう、この地球を傷つけるのはやめようと……。
この地球が傷つけば、タイガが苦しむ。
そして、彼が死んでしまう。
救世主であるタイガにそんな酷い仕打ちはあんまりじゃ……。
後に魔王派の者達も、わしら旧タイガ派によって、各地に封印された。

やがて、地球が再生を始めた頃、猿族を乗せた箱舟が帰ってきた。
じゃが、箱舟に、この事件を引き起こした張本人である魔王ロンゼは乗っていなかった。
箱舟には、罪のない猿族達だけが乗っていた。
戦い疲れたわしらは純朴な彼らに未来を託すことにした。
そして、それがおぬしら、人間の始まりだ。
4—3
「これが、わしの知っている〝マザーの戦い〟の全てじゃ」
ハークは氷がとけて温くなったジュースを一気に飲みほした。
「な、なんか、私が今まで悩んできたこととか、生きてきたことが小さく感じます」
私はかたくなったハンバーガーをテーブルの上に置いた。
「そりゃ、突然、ワシらのことを聞かされれば、誰でも驚くのう。じゃが、おぬしら人間も捨てたもんじゃない。確かに、わしらのように戦争も繰り返したし、まだ戦争をやめない国もある……じゃが、わしらが、おぬしらに感心したことがある。それは学ぶということじゃ。わしらなんぞ、戦争の無益さに気がつくまで、地球を四つも壊してしまった。人間の学習能力は半端ではないな」
「そう……かもしれませんね」

私とハークは目を合わせ、お互いに笑みを浮かべた。
ハークがまた、ご自慢の長髭に手を触れる。
その時だった。
廊下から「ドタドタ」と足音をたてて、猫人間が血相を変えて部屋に入ってきた。
「失礼します、ハーク様」
「なんじゃ、騒がしいのう」
「〝悪魔の蓄音機〟が見つかりました」
それまで、優しい目をしていたハークが、恐ろしい獣の目をした魔族の顔になった。

第五章　婦子羅姫

5―1

俺は不思議な妖怪に連れられて、真夜中の東京湾に来ていた。

ミノムシみたいな汚い格好をしたじいさんと、暗く静まりかえった港で船を待っていた。

「おい。本当にこんな時間に、船なんか来るんだろうな。罠なんかだったら、即効、皆殺しだぞ」

ミノムシじいさんは口を開けて、笑った。

「ふぉふぉふぉ、これは恐ろしいことを申される……。心配はご無用。もう、しばらくで、船は来ます」

俺は舌打ちをして、黄色く光る月を見上げた。

昼間、公園でミノムシじいさんは俺に「自分達の、妖怪の長に手を貸してくれ」と言った。

それは今、日本の妖怪が絶滅の危機に瀕しているらしい。

俺はその救世主となる人物だそうだ。
よく事態がつかめなかったが、その長と会ってみることにした。
妖怪と言っても、俺の親友、ショーンを殺した魔族の仲間であることは間違いない。
もし、罠だったり、俺の……ショーンの身体でもある、この心臓目的だったら、その妖怪の住みかごと、ぶっ壊してやるつもりだ。
ただ、むしゃくしゃした気持ちを誰でもいいからぶつけたかっただけ、かもしれない。
「来ましたぞ」
「は？　どこに？」
辺りを見回したが、船なんてものはどこに見当たらない。
「お前、俺をからかって……」
その船はいきなり海面から、港に浮かび上がってきた。
「げっ！」
ミノムシじいさんは特に驚いた顔も見せずに、平然としている。
「では、魔王様。船の中へ……」
それは船と言うには程遠い代物だった。
古びた船体にはサンゴや見たこともない色をした貝や海草などの海の生物が附着していた。

俺とミノムシじいさんが船内に乗り込むと港を出発した。
「魔王様。奥へ参りましょう」
ミノムシじいさんに案内されて、俺は狭い船内を歩いた。船の中は外見と同様にカビ臭かった。
俺が奥へと進むごとに、妖怪達がうじゃうじゃ出てきた。
物珍しげに俺を見つめる。
「ちっ、うぜぇ奴らだ……」
俺が悪態をついていると、船が大きく揺れた。
「なんだ、この揺れは……」
俺が驚いていると、ミノムシじいさんが説明してくれた。
「ご安心ください。この揺れは、船が海中に潜ったためです」
俺は鼻で笑った。
「バケモンが潜水艦かよ。大したもんだな……そーいや、名前、聞いてなかったな」
俺がそう言うと、ミノムシじいさんは振り返って微笑んだ。
「これは嬉しい……。魔王様に私のような者の名を聞いてもらえるとは……。申し遅れました。私は弔辞六進坊（かいじろくしんぼう）、鮫嶽蛇偶衛門（さめがけへびえもん）と申します」
俺は唖然とした。

「そ、そうか……んじゃ、略して、ミノでいいか？」
　彼は首を傾げた。
「は？」
「よし、決まり……だな。俺は遠丸（とおまる）　俊介（しゅんすけ）だ」
「遠丸　俊介？　何を申されるかと思ったら……」
　ミノは吹き出した。
「な、なんだよ？」
「魔王様は、魔王様でございます」
「……ああ、そうかよ」
　考えてみたら、こいつは妖怪だ。
　俺はこんな化け物と仲良くなる理由なんかない。
　なに、フレンドリーになってんだよ。
　俺は頭を左右に振って雑念をはらった。

「ところで、この船はどこに向かってんだ」
「はい、海呪城（かいじゅじょう）でございます」
「城か……」

そうこうしているうちに船は、その海呪城とやらに着いた。

5—2

その城は深い海の底にあった。
ミノ曰く、城は人間達に見つからないように、常に移動し続けているらしい。
巨大な移動要塞と言ったところだ。
まあ、そんなことはどうでもいい。
とにかくアイツが消えた原因がその妖怪のボスならば、すぐにでもぶっ殺してやる。
「さあ、魔王様。我らが長、婦子羅姫がお待ちです」
城内に入った俺はミノの案内のもと、奥へと進んだ。
歩いていると、すれ違う妖怪達が俺を睨む。
俺はいつでも、戦う覚悟はあった。
だが、興奮する妖怪達をミノが抑えた。
「やめんか、お前達。この方は人間の姿をされているだけだ」
ミノが妖怪達にそう言い聞かせた。
「申し訳ありません、魔王様。ご無礼を……」
「いや、別に……」

妖怪なのに、ミノにかばってもらってなぜか嬉しかった。
ミノは大きな赤い扉の前で、足を止めた。
「弔辞六進坊、鮫嶽蛇偶衛門。ただいま、戻りました」
大きな扉は衛兵によって、開かれる。
そこは全てが赤い色で統一された部屋だった。
中に入ると、床も、柱も、椅子も、全てが赤い。
そして、中央には薄い幕で仕切られていた。
うっすらだが、幕からは一つの影が透き通って見える。
「よう戻ってきたな。爺」
ミノは床にひざまずいた。
「はい、魔王様をお連れしました」
「そうか、ご苦労じゃったな」
「ちっ」
俺はわざと聞こえるように舌打ちをする。
客が来たというのに、顔も見せない傲慢な妖怪のボスに対してイライラしていた。
「そなたが魔王か？」
俺は頭をボリボリと掻きながら言った。

「まあ、そういうことになるな」
　ミノが慌てて、俺に駆け寄って耳打ちをした。
「魔王様、姫の御前ですぞ。お言葉をお選びてくだされ……」
「あ？　なんだと？」
　俺はわざと大きな声で言った。
「姫？　妖怪に女なんかいたのか？　ま、どうせ、汚い顔した女なんだろうよ」
「魔王様！」
　ミノが俺を必死に止めようとしたが、口は止まらない。
「隠さなきゃいけないほど、汚い顔なのか？」
　幕の裏に見える影が、静かに立ち上がった。
「そなたは妾に不満があるのか？」
「ああ、大有りだね。人がわざわざ、遠い所から来たってのに、顔も見せないバカは人間の中にも、滅多にいないぜ」
「そうか、そなたに顔を見せればいいのだな」
「ひ、姫！」
「爺は黙っておれ」
　そして、幕がゆっくりと上がっていく。

俺はどんな化け物が出るのか、ニヤニヤ笑いながら待った。
幕が全て上がった。
そいつは妖怪と思えないほど、綺麗な顔をしていた。
切れ長の目に、白い肌……それとは対照的な赤い唇。古来から伝わる日本的な美人だ。
艶のある長い髪を首元で結い、真っ赤な装束を着ている。
「これで満足か？」
妖怪のボス、婦子羅姫はニッコリと笑った。
俺は黙って、彼女を見つめていた。
「どうした？　魔王」
なぜだ……なぜだ？　なぜ、アイツがここにいる……。
「そうだよ。おい、どうしてだ？　なんで、お前がここにいるんだ！」
「なに？」
婦子羅姫は首を傾げた。
「訊いてんのはこっちだ！　なぜ、お前がこんな所に……」
俺は無意識のうちに、足を動かしていた。フラフラと進み、婦子羅姫の両肩を強く掴むと、頬から熱い涙が流れていくのを感じる。

「ハハハ……早く言えよ。なんだよ……ここにいたのか」
「ど、どうしたのじゃ？　魔王」
　婦子羅姫はひきつった顔で、俺を見つめている。
　何も考えずに、婦子羅姫を強く抱きしめた。
「ああ、生きていたんだ……」
「や、やめんか！　魔王！　そなた、誰かと勘違いしておらんか？」
「ま、魔王様、姫の前で無礼ですぞ！」
　ミノが無理矢理、婦子羅姫から引き離した。
「え？　人違い……う、嘘だろ。ち、違うよな？　お前は俺の事、前から知っているだろう。会った事あるだろう。ほら……入学式で初めて会った時、お前、緊張しててよ。俺がトイレを掃除してたら、女子トイレと間違えて入って来たじゃん。あと、他にもさ、キャンプで俺がカレー作ってて、火傷した時、心配だからって、お前も病院について来てくれたじゃんか」
　俺が必死に喋っても、婦子羅姫は首を横に振るばかりだった。
「知らぬ……魔王、一体、どうしたというのだ？」
「ち、違うのか……ふ、ふざけんなよ」
　俺は抑えきれず、天上に向かって叫んだ。

「ふざけんなよ！」
どくん……どくん……どくん……どくん……。
俺の胸の中で、大きな鼓動が聞こえる。
その直後に俺の全身から金色の光りが放たれ、部屋全体を覆った。
真っ赤な部屋は全て金色に染められていく。
……この光景を前に見たことがあるような気がする。なんだろう……思い出せない。

心地よい歌声が耳に流れる。
とても、気持ちがいい……。このまま、ずっとこうしていたい。
目を覚ますと、俺は柔らかな太ももの上に頭を置いていた。
「大事ないか？」
視線を上にやると、そこには婦子羅姫がいた。
「ふ、婦子羅姫！」
俺は直ぐに身を起こそうとしたが、激しい頭痛が俺を襲った。
「いててて……くそ……」
「まだ、動くな。そなたが暴れたので、爺がそなたの頭を殴ったのじゃ……。心配するな、妾とそなた以外、この部屋にはおらぬ」

婦子羅姫は俺の額にそっと触れ、美しい歌を歌い始めた。
彼女の身体から、とてもいい香りがした。何の匂いだろう。多分、何かの花の匂いだ。
思わず、顔が熱くなる。
そんな俺には気にもとめず目をつぶって、歌い続けている。

鳴いておくれ、鳴いておくれ、青空の鳥。
咲いておくれ、咲いておくれ、草原の花。
跳ねておくれ、跳ねておくれ、大海の魚。
見ておくれ、見ておくれ、愛する人よ。

婦子羅姫は歌い終わっても、目をつぶって鼻歌で演奏を続けている。
「何があったか知らぬが、妾はそなたと会ったのは今日が初めてじゃ……でも、そなたが妾の顔を見せろと言った時は、なぜか……嬉しかった……」
そう言って、また鼻歌を続ける。
俺は婦子羅姫の鼻歌を子守唄にして、眠りについた。

5―3

俺は目を覚ますと、婦子羅姫のいた真っ赤な部屋ではなく、病院のような真っ白な部屋にいた。
お歯黒をつけた召使いらしき妖怪が「新しい服に着替えてくれ」と言った。
「新しい服？　どこにそんなもんがあるんだ？」
俺は辺りを見渡した。
すると、部屋の隅に黒い服……ではなく、鎧があるのに気がついた。
それは何か、黒い血で塗ったような……そんな禍々しい鎧に見えた。
「魔王様、もうご気分はよろしいので？」
ミノが笑顔で出迎えた。
「ああ、すまない……。迷惑かけちまったな」
俺は素直に謝った。
「いえいえ、お気になさらず……ん？　魔王様、その鎧は……」

ミノは身に着けた黒い鎧を指差している。
「似合わないか？」
「いえ、そんなことはありませぬ。この老いぼれ、久方ぶりに見とれましたぞ」
「やめろよ……」
柄にもなく、顔を赤くした。
「ところで、婦子羅姫は？」
「はい、姫なら新牙（しんが）の間に居られます。私も姫に呼ばれておりますので、ご一緒に参りましょう」
「ああ」
いつの間にか、ミノや婦子羅姫に対して、憎しみや怒り、それに警戒心も捨てていた。
心を許している。
俺達は新牙の間の中に入った。
そこは大きな石製の台が置かれていた。台にはどこかの地図が載せられている。
「二人とも、来たか」
「おい、なんなんだ？　この鎧は……」と俺は訊いた。
鎧をコンコンと叩いてみせる。
婦子羅姫は俺の姿を見て、ニッコリと嬉しそうに笑った。

「似合うでないか！　やはり、思ったとおり、そなたには黒が似合っておる」
　婦子羅姫は「うんうん」と一人頷いている。
「魔王よ、今日からそなたは〝黒王（こくおう）〟と名乗るがよい」
「こくおう？」
「姫、それはいいですぞ。この鎧といい、お顔立ちといい、黒がお似合いです！」
「爺もそう思うか」
　今度は婦子羅姫一人だけではなく、ミノもまじって、二人で頷いている。

「なあ、ところでこの部屋はなんなんだ？」
　俺が部屋を不思議そうに眺めていると、ミノが説明してくれた。
「ここは人間界でいう作戦室ですな」
「作戦室？」
「そうじゃ。そなたには、頼みごとがあって、この海呪城に呼んだのじゃ」
「言えよ……人間を殺すこと以外なら、なんでもやるぜ」
　婦子羅姫は、しばらく黙ったあとに、俺の顔を窺いながら言った。
「そなたに、城を……魔族の城を奪ってもらいたいのじゃ」
　婦子羅姫は黙って、俺の目を見つめる。ミノも答えを待っている。

俺はあっけらかんと答えた。
「城？　それぐらいなら、別にいいぜ。引き受けてやるよ」
婦子羅姫に笑顔が浮ぶ。
「まことか!?」
俺は肩をすくめた。
「ああ、どうせ、魔族の城なんて人間には関係ない……つーか、いらねぇもんだろ」
そう言うと、ミノが俺の手を強く握りしめた。
「黒王様、ありがとうございます！　この老いぼれ、微力ながらお供させていただきます」
ミノはとても勇んでいた。
「妾からも礼を言うぞ。本当にありがたいぞ。黒王」
俺は堅苦しい口調で礼を言う二人をとめさせた。
「あ～、もういいよ。それよか、その城ってのは？」
婦子羅姫の顔に、真剣な表情がうつる。
「その城は先日、妾が異国に送った内偵が見つけたものじゃ……奪って欲しいとは言ったが……今、城主はいないはずじゃ」
ミノが台に広げてある地図の、ある一点に長棒で指した。

「黒王様、こちらでございます」
俺はミノが指した地点を見たが、どうも、場所が分からない。
「……悪いが、俺は地図がダメな方でな。どこの国だ、これ？」
「はい、仏蘭西でございます……」
「フランス？」
「そうじゃ。仏蘭西にそれはある」
婦子羅姫は切れ長の目を、更に細くして言った。
「マザーの遺産……〝悪魔の蓄音機〟がそこにある」

第六章　ドラム

6—1

なぜだ？　なぜ、奴には効かない……。

「僕の……師匠の技がなぜ、効かないんだ！」

焦っていた。

森の樹の下で影を潜めつつ、相手の動きを探る。

もう、夜が明けてしまった。

戦闘中に何度も、地面に転んだせいで顔は泥だらけ。手にも血がこびりついてとれない。

せっかく、師匠からもらった黒いスーツもボロボロ。

「満身創痍か……」

ドラムとの戦いは何時間も続いた。

奴には月花流の術が全く効かない。

僕は自分のことを、まだ未熟だと思っている。

少なくとも、自惚れてなどいないと思う。

でも、師匠の術は……自分で言うのもなんだが、数ある仙術の中では最強だ。
月花流は暗黒術。
化け物を退治するような仙術などは基本的に封印術が多いものだ。
だが、そのような正道と呼ばれる術とは違い、月花流は抹殺術が大半を占める。
抹殺術とはその名の通り、化け物を封印するなどという生半可ものではなく、終わらない。
その命を強制的にこの世から葬る技である。
つまり、化け物には一切の情けをかけないということだ。
僕は残り少ない符の中から三枚を取り出し、その符に長い針を一本ずつ刺した。
「先生、僕にお力をください……」
祈りながら、針の刺ささった符を、誰もいない森の闇へ放り投げた。
「双頭邪(そうとうじゃ)……吸震撃(きゅうしんげき)！」
投げられた符は地面に落ち、針が土に突き刺さって震えた。
やがて、針がもぐらのように土の中へと潜り、「もこもこ」と音を立てると、二本の首を持った大きな蛇が地面から出てきた。
蛇は符と同じ数だけ、現れた。
僕はそっと足音をたてずに動いた。

しばらくすると、ある一点から強い邪気を感じた。
「そこか！」
僕は三匹の蛇をその邪気が感じられる場所に走らせた。
すると、木の影からドラムが現れた。
「蛇は嫌いだ……」
今だ！
軽く息を吸い込んで、唱える。
「ひゅう……爆！」
ドラムの体に、一斉に噛みついた蛇達が風船のように丸く膨らんで爆発した。
森が震え、燃えた木が地面に倒れる。
辺りに黒い煙が濛濛と立ち昇った。
「これじゃ、何も見えない……」
僕は目を覆って一歩、後退りした。
その時だった。ドラムが黒い煙からその大きな身体を見せた。
咄嗟に拳を突き出したが、遅かった。
僕の拳よりも先に、ドラムの光る腕が僕の胸を突き破った。
「ぐわあああああ！」

「今一度、問う。なぜ、そうまでして魔族を嫌う、憎むのだ？」
口からたくさんの血を吐きながらつぶやいた。
「お、お前に何が分かる……。ぼ、僕の妹はまだ、小さかったんだ。僕はあの日、妹を引き取った日、必ずこの子を立派な大人に育てようと誓ったんだ。僕に残された夢だったんだ。たった一つの生きがいだった。それを……お前は……お前らは！」
ドラムは自身の腕を空に掲げた。
それと同時に僕の足も宙に浮ぶ。
じっと、僕の目を不思議そうに見つめている。
「それは少し、おかしいぞ。お前はそういう風に考えていたかもしれんが、本人は違う考えを持っていたかもしれん。例え、短い時間でも、お前と一緒に同じ時を過ごしたというだけでも、幸福だったと……」
ドラムにそう言われて、僕は心のどこかで安心していた。
確かに、ホッとしていた自分がいた。
だが、僕はそう思ったことを許せなかった。
歯痒い気分でドラムを睨みつける。
「お前なんかに分かってたまるか！」
僕は残り全部の符を、自らの口の中に放り込んだ。そして、飲み込む。

「これで終わりだ！」
くるみ……すまない。兄ちゃん、途中で諦めてしまうけど、許してくれ。
術を唱え始めると、全身に経が浮び上がった。
絶対に使ってはならないと教えられた術……。
師匠との約束をこんなに早く破ってしまうとは思わなかった。
先生、ごめんなさい……。
僕は目をつぶった。
「止錠命（どじょうめい）……自砕（じさい）……」
しかし、術は途中で、強制的に止められた。
目を開くと、大きなドラムの拳が僕の口の中に入っていた。
それが術を唱えるのを邪魔している。
「やめろ、自害など、無意味だ」
「ううう……じなぜでぐれ……ぼ、ぼがぁ、バガだっだんだ……」
気がつくと、僕は泣いていた。
一年ぶりの涙だった。
師匠と初めて会った日以来のことだ。
しかも、一番こんな情けない姿を見せたくない相手に……化け物に見られるなんて

……。

ドラムは依然、無表情のままでいる。

しばらく、黙って僕の目を見つめたあと、こう言った。

「お前が弱いわけではない……お前の使う術が未完成なのだ」

僕は耳を疑った。

なぜ、ドラムがこの術のことを知っているかは分からない。

だが……確かに、彼は僕のことを気遣ってくれているように見えた。

6—2

僕は海峡にある小高い丘の階段を駆け上っていた。
必死に汗をかきながら、長い階段を駆け上っていく。
「まだ、間に合う」
そうだとも、まだ大丈夫。
お土産屋が見えてきた。
隣りにある公園には花火を見るために集まった人達で溢れかえっていた。
「くるみ！」
僕がそう叫ぶと、小さな背中が動いた。
その時のくるみは、先週ボーナスで買ってあげたばかりのパンダの柄が入ったワンピースを着ていた。
少し伸びた髪は左右に別けて、括っている。
昨日の朝、「髪型、変えたんだね」と言うと、ニッコリ笑って「うん」と言っていた。
くるみが僕の声に気がついた。
「あ、お兄ちゃん！」

僕は荒くなった息を整えることなく、くるみのもとへと走った。
そうだ、ここで僕が休まなければ、間に合ったんだ。
バカだった……。
さあ、くるみ、おいで！
くるみは振り返って、僕に笑いかけた。

その時、海峡から金色の光りが放たれた。
大丈夫だ、僕の方が間に合う。
くるみを光りに当たらない場所まで、引っ張ればいいんだ。
僕はくるみに手を伸ばした。
同時に光りもその進行を早めた。
「くるみ！」
右手がくるみの肩に触れた時、海峡から放たれた閃光が一瞬にして辺りに広がった。
「う、嘘だろ……」
光りは僕の右手とくるみを呑み込んだ。
右腕は肘から先が無くなっていた。
「うわあああああ！」

なぜだ、なぜだ！
間に合っていたはずだろう……。僕は休まずに走ったんだぞ！
この手はちゃんと、届いていたはずだ。
それなのに……。

＊

僕は目を覚ました。
めじりには涙が溜まっていた。横を向くと、溜まっていた涙がこぼれた。
「そう自分を責めるな……あれは事故だったのだろう。お前の右手が彼女の肩に触れても、間に合わなかっただろ？　助けられなかっただろ？　だから、あまり自分を責めるな」
大きな木にもたれかかっていたドラムがそう言った。
「お前か……お前が僕にあんな夢を見せたのか……ふざけるな！」
怒鳴り声を上げると、胸に強い痛みを感じた。
僕は上半身を裸にして、緑の草の上に寝ていた。
そして、ドラムにあけられたはずの胸の穴は薬草のような物で塞がれていた。
「人の心の中に、ずけずけと入りやがって……」
必死に身体を起こそうとした。だが、身体がいうことをきいてくれない。

「無理だよ。まだ動けん……再戦は休養したあとでもいいだろ?」
ドラムは青い空を見上げた。
空は雲一つなく、晴天に恵まれている。
昨日はドラムと戦いに明け暮れていて、天気のことなど、気にしなかった。
それに、この森をそんなに美しいと感じなかった。
緑に囲まれた朝は、とても心地よかった。
小鳥達の鳴き声、たまに顔を見せるウサギ、どこか遠くから聞こえてくる川のせせらぎ、そして、ベッド代わりのフサフサした草の絨毯。
森の恵みは僕に一時の安らぎを与えてくれた。
「なぜだ……」
ドラムが黙って僕の方を振り向く。
「なぜ、僕を助けた? なぜ、僕を手当てした……」
彼は空に視線を戻すと独り言のように語った。
「戦う意味がないと思ったからだ。殺す必要もないと思った。ただ、それだけだ」
僕はとても、情けなく思った。
化け物に負けて、そのうえ、命まで助けてもらった。僕はどうしようもない気持ちを拳に力いっぱいこめて、地面を叩いた。

「やめろ。森が恐がる」
耳を疑った。
「え？」
「森で暮らしている生き物達が、お前の憎しみを恐がる」
「ぼ、僕を……」
ドラムは立ち上がって、もたれかかっていた大きな木を指差した。
「この木の上に小鳥の巣がある。今、卵が孵る時でな。それを食べようとする下級魔族や獣達がいたので、私はしばらく、この森で侵入者を監視することにしたのだ」
僕は唖然とした。
化け物が……魔族がこんな優しさを持っていたなんて……。
「だから、この森に猟を目的として入ってきた人間を脅かして帰していた。多分、森から帰る途中で、人間達は下級魔族によって食べられたのだろう」
僕は少しでも魔族を感心したことをバカバカしく思った。
「人間達を殺さずに帰そうとしたのなら、なぜ、最後まで見届けなかった？」
そう言った途端、ドラムの表情が強張った。
ドラムが逆上して、僕を殺すのかと思った。
横たわった僕の前に歩み寄る。

すると、木の影から数匹の化け物が現れた。
「今日こそ、この場所を返してもらうぜ。ドラムの旦那」
その化け物達はドラムよりも、随分、背が低く、猫背だった。
顔はとても醜く、全身から腐ったような悪臭が漂う。
その臭いだけで森の生き物達が逃げるぐらいだ。
化け物達はそれぞれ、斧を持って構えていた。
ドラムは僕に背を向けたまま、呟いた。
「人間達を森の外まで見届けていたら、小鳥の巣が襲われる危険性がある……理由はそれだけだ」
そう言って、化け物達に飛びかかった。
一匹の化け物が斧を振り下ろした。
だが、ドラムの引き締まった左腕が斧を防ぎ、彼の右腕が化け物をふき飛ばした。
化け物はそのまま、木に背をぶつけて気を失う。
次にドラムは拳を空に掲げた。
すると、それに呼応したように空からイナズマが化け物を貫いた。
雷撃によって二匹の化け物が気絶して倒れる。
あと、三匹……。

時間にして一分も経たないうちに、次々に化け物達は倒れていく。
「つ、強い……」
僕はドラムの力を認めざるを得なかった。
更にドラムは両手を合わせて、化け物にそれを向けると、パカッと開いた。
そこから、無数の光りが一筋の線を作って、化け物達を襲う。
化け物達は腕や足をやられ、地面に倒れた。
「あ……」
この技、どこかで見たことがある……。
ドラムは振り返って、小鳥の巣のある木を見上げた。
「早く、育てよ。そうしないと、また犠牲者が出てしまうぞ……」
僕は全身に鳥肌をたてていた。
「……」
この技、似ている……いや、同じものだ。
ドラムの技は月花流そのものだ。
僕が使っている術と、多少、違うところがあるが同じ技だ。
符や武具を使って、ようやく扱える月花流の術をドラムは己の身体から直接、術を出している。

僕が使う術は、生身の人間では耐えられないような力を持っている。
かと言って、魔族の者が使ったとしても、五体満足でいられるとは思えない。
それをドラムは難なく行っている。
しかも、彼は手加減をして、化け物達を殺してはいない。
僕から見れば、その戦い方は余りにも、甘い……いや、優しい戦い方だった。
ふと、倒れている化け物達に視線を移した。
「あっ！」
一匹の足を失くした化け物がドラムに向かって、斧を投げようとしていた。
僕はズボンのポケットから、どんぐりを取り出し、化け物に向かって放り投げた。
「邪送沈吸雷（じゃそうしんきゅうらい）」
どんぐりが化け物の右腕に当たると、一言つぶやく。
「ひゅう……爆！」
どんぐりが小さく爆発した。
化け物の斧は腕ごと無くなる。その直後に化け物が悲痛な叫び声をあげた。
ドラムは僕の方に振り返って微笑む。
「今の術は見たことがないな……新しい術か？」
僕もドラムの顔を見て笑った。

「いいや、くるみの使っていた、ただの遊びだよ」
ドラムは口を開けて、大笑いした。

6—3

夜の森で、ドラムは捕ってきた魚を焚き火で焼いていた。
その匂いにつられて、イタチが寄ってくる。
「あんたは……一体、何者なんだ？　教えてくれ」
僕の胸は驚いたことに半日で癒えた。
ドラムが塗ってくれた木の蜜と薬草のおかげだ。
彼は魚の焼き具合を見ている。
「私は……ドラム。虎の夢と書いて、虎夢という」
そう言って棒に突き刺した魚を僕に手渡した。
「食べろ。お前のために犠牲となった魚だ」
僕は黙って、魚を食べる。
脂がのっていてとても美味しかった。
ここ何日か、ろくな物を食べていなかった。
もっぱら主食は地面に生えている雑草だった。

「お前は……なぜ、私がお前の術を知っているのか、使えるのか、それが知りたいのだな？」

僕は食べながら、頷いた。

ドラムはゆっくりとした口調で、話を始めた。

「私は何百年か前に、日本という国を訪れたことがある。私はその時、中国で強い妖怪と戦ってな。戦いには勝ったものの、かなりの深傷を負ってしまった。その傷を癒すために、日本の豊津郷（ほうづきょう）と呼ばれる有名な泉に訪れた。そこで、四之宮（しのみや）　凪（なぎ）という元人間の仙女に出会った」

四之宮　凪……聞いたことがあるな。

ドラムは焚き火を虚ろな目で見つめていた。

「凪は私の事を歓迎してくれた。豊津卿はとても、緑の美しいところで、見たこともないような東洋の花々が一日中、咲いていた。私は凪の献身的な介護と不思議な泉のおかげで、傷も癒えてきた……当初、私は傷が癒えたら直ぐに日本を離れるつもりだった。だが、離れなかった……いや、離れられなかった。なぜなら、私は凪を愛してしまったからだ。そして、彼女も私を愛してくれた」

二人は愛し合った……ということか。

化け物と仙女の恋……すごいな……。

僕は残っていた魚を全部、口の中に放り込み、ドラムの話を聞く事に専念した。

「そうだ……私達はとても幸せだった。ある時、私は彼女に護身術としてある流派を教えた。それは人間の身体でも使える術、五星流……。元々、精の強かった彼女は、その術を難なく覚え、自分のものにした。熱心な彼女は自己の術もいくつか作っていた。私にもその術の一部を見せてもらった。その術は桃色のきれいな花が円陣の中に浮んでいるというものだった。私はその時、その花の名を知らなかった。彼女に訊ねると、彼女はニッコリ笑って教えてくれた。それは月の光りを浴びて育つ花……月花、と」

僕は愕然とした。

つまり、化け物を殺すための術……月花流は化け物から教わった人間の術ということになる。

驚くと同時に困惑した。

そんな……僕は今まで、化け物を憎んで、憎んで、憎んで、戦ってきた。

くるみの死を素直に受け入れず、化け物を憎むことによって、僕は今日まで生きてこれた。

それを支えてきた術が……師匠から教わった術が化け物のものだったなんて……。

ドラムはまだ、焚き火を見つめたままでいる。

「私と凪の幸せな日々はそう長くなかった……。それを壊したのは人間だ。豊津卿の不思議な泉の噂を聞いた人間達が、私達のもとへ攻め寄って来たのだ。私は凪にここを捨てようと言った。また、新しい場所を探そう、と。だが、凪は首を振った。凪は言った、『この豊津卿を守るのが私の役目だ』と……。そして、私達、二人は人間達に危害をくわえずに脅かして帰した。その直後、人間達は妖術を使える人間の術師をよこし、再び、豊津卿を襲った。術師の力は半端ではなかった。私も凪と一緒に応戦した。お互いの術と術が反発しあい、大きな爆発が起こった。その時の衝撃で、豊津卿は崩壊し、その場にいた人間達や術師も、みんな、死んだ。そして、私と凪も爆風に巻き込まれてしまった。目を覚ました時、私は日本ではなく、小さな無人島にいた。その後、凪の安否を知るために、私は再び、日本に戻り、豊津卿に向かった。だが、焼け野原となった豊津卿には誰もいなかった。そこにあったのは、豊津卿を襲った人間達の、いくつもの墓だけだった」

　僕は思わず、息を呑んだ。

「それで……凪さんは見つからなかったのか?」

「ああ、私もその時、凪は死んでしまったと思い、凪を忘れるために、私は日本を旅立った。それから、何十年か経った頃、私はエジプトにいた。そこで、ある人間と戦った。まだ、幼い顔した青年だったのだが、青年の使う術は私が凪に教えた術とそっくりだった。

無論、私はその戦いに勝った。そして、青年に訊ねた。『お前の師は誰だ?』と。すると、青年は四之宮　風と答えた。私はすぐさま、日本に向かい、四之宮　風という術師を探し回った。それから、何年か経った後、風という人物に出会えた。彼女は凪の娘だった。風は、私が初めて日本に来た時のように、凪と同じように、私を暖かく迎えてくれた。風が言うには、凪は私と爆風で生き別れになったあとに、一人の人間の男と出会い、結婚したそうだ。そして、風に術を教えたの後、重い病になり……死んだ。私は彼女の墓標の前に立ち、泣いた……。ただ、泣く事しか出来なかった。それが、私が流した最初で最後の涙だ」

焚き火の炎が、消えかかっていた。

僕は一種の放心状態に陥っていて、正直、頭の中はパニックだった。

「待ってくれ……さっき、話していた、エジプトで戦ったという青年は……その青年の名前、分かるか?」

ドラムは怪訝そうな顔で言った。

「青年の名……たしか、草樹(そうき)と名乗っていたな。それがどうかしたのか?」

僕は一人で合点した仕草をした。

「ま、間違いない!　やっぱり、そうだ。その草樹という青年は、僕の師匠だ」

「なに……」
　ドラムが目を大きく開いた。
「その人は僕に月花流を教えてくれた人なんだ。その時はまだ、人間だったころだ。今では仙人になっているよ」
　昔、師匠も、化け物に家族を殺され、その復讐を果たすために、世界中を駆け巡っていたのだ。
　何年も復讐の旅を続けたそうだが、結局、復讐は果たせず、旅の途中で日本に帰ったそうだ。
　ある日、突然、日本に帰りたくなった、と師匠は言っていた。
　その理由は味噌汁が恋しくなったからだ。
　曰く、
「味噌汁は日本の味、家庭の味、母の味、味噌汁を飲んでいれば、死んだ家族のことも思い出せる。その死んだ家族の分も自分が味噌汁を飲めばいい」
　らしい。
　師匠はいつも、
「お前にも、その味が分かれば、いいがな……」
　と、言いながら味噌汁を作っていた。

不敗を誇る師匠が、数々の魔族の中で、唯一、恐れた化け物がいた。
師匠の話では、全身紫色で、額に二本の角、背には大きな翼をもったドラゴン。
エジプトの灼熱の砂漠で戦った化け物……。
その化け物が、師匠が敗れた最初で最後の相手だ。
師匠の話とドラムの話は全て一致する。
四之宮　風という名前も、師匠から聞いている。
その人は、月花流三代目である。なぜ、二代目ではなく、三代目なのか……。
師匠の話では、初代が絶対、誰にも二代目は名乗らせなかったらしい。それは既に二代目が存在したからだと思う。
なぜなら、二代目は僕の目の前にいる。
僕は少し戸惑いながらも、感動していた。
確かに化け物と人間は相容れぬものかもしれない。
だけど、ドラムと凪さんは違った。
ちゃんと、二人の間には愛があったはずだ。
人間とまったく変わらないものが、そこにはあったはずだ。
だからと言って、僕の憎しみも全部、消えることはなかったけど、少し気が楽になった。

いつの間にか、僕とドラムは、笑っていた。
ドラムが微笑んで、こう言った。
「ここでも、凪の残した種と出会ったか」
「そうか……本当に凪さんっていう人はすごい人間……じゃなくて、仙女だったんだな。みんなをひきつける力を持っているんだよ、きっと……」
僕がそう言うと、ドラムは自分のことのように嬉しそうに笑った。
「違いない……」

第七章　窓

7―1

　私はモニタールームに駆け込んだ。
　ハークがオペレーターに叫ぶ。
「〝あれ〟は、どこだ！」
「まだ、正確な位置は把握していませんが、現在、ヨーロッパ内ということは確認が取れています」
　ハークは物足りない顔で怒鳴った。
「バカモノ！　何のために莫大な金を使ってまで、衛星を打ち上げたと思っておるのだ。世界の隅から隅まで探せ！」
　いつになく、激しい口調でオペレーター達に指示を出している。
「まったく……使えん奴らだ」
　ハークが悪態をついていると、部屋の中央にある巨大モニターに、一人の青年が映った。
「よう、ジジイ」

その青年は、ハークを馴れ馴れしい口調で呼んだ。
ハンサムな顔で、鼻が高く、目もくっきりとした二重、きりっとした眉。
長髪だけど、その端正な顔立ちで十分、女性誌の表紙を飾りそうな男性だ。
ハークは煙たそうな顔で、オペレーターに「モニターから消せ」と指示した。
青年が慌てて、それをとめる。
「ま、待てよ、ジジイ。今日はとっておきの情報を持ってきたぜ」
彼はため息をついて、目を閉じた。
「なんじゃ？」
モニターの中で、青年を片目をつぶりながら、人差し指を立てた。
「それが大変なのよ。なんと、あの〝悪魔の蓄音機〟が見つかったらしい」
ハークは首を横に振る。
「……知っておる」
青年は「ありゃ」と言って、コケる仕草をした。
「もういい、ルクス。おぬしは自分の任務に戻れ……」
ルクスと呼ばれた青年は口を尖らせた。
「へっ、聞くだけ聞いて、捨てるのかよ……まあ、いいさ。んじゃ、場所も知ってんだな……じゃあ、俺は仕事に戻るぜ」

ハークがハッとした顔で、目を開いた。
「ま、待て！　おぬし、〝あれ〟の正確な場所を知っているのか！」
ルクスが首を傾げた。
「へ？　あ、うん。まあね……」
「ほ、本当か！　それを早く言わんか」
彼は不機嫌そうに、頬を膨らませた。
「なんだよ、逆ギレじゃん。ジジイが俺の話を聞かないから、悪いんだろ」
ハークはだいぶイライラしている様子で、短い首をボリボリと掻いている。
「だ～、もう！　謝るから、早く教えんか！」
それを聞いたルクスは「へへっ」と笑い、
「聞こえねぇな」
と、意地悪そうに言った。
ハークは小さな顔を真っ赤にして、言った。
「わ、悪かった。今度からはちゃんと、真面目に話を聞く。これでいいのか？」
ルクスは人差し指で鼻を掻いた。
「上等、上等」
そう言うと、彼の顔から笑みが消える。

「〝あれ〟は……〝悪魔の蓄音機〟は……フランスにある」
ハークの顔が険しくなった。
「フランスか……」
「そっちに詳しいデータを送っておくぜ」
「うむ」
ルクスの顔から甘いマスクが剥がれ、氷のような冷たい目をした獣が現れた。
その顔は化け物そのものだった。
「ジジイ……今度こそ、〝あれ〟をぶっ壊してくれ」
彼は静かに頷く。
ルクスはハークの意志を確かめると、また、もとのフニャけた顔に戻った。
「あっ、そこにいる可愛い子ちゃん、だれ？」
モニターから私を指差した。
ハークはまた、ため息をつく。
「おぬし、用が済んだのなら、さっさと、任務に戻れ」
「いいじゃんかよ！　俺にも教えろよ」
ハークが黙って私の方を見たので、私は答えを聞くまでもなく、モニターに近寄った。
「私、倉石　真帆と言います。よろしく、お願いいたします」

言いながら、何をよろしくお願いするのだろうか、と思った。
「く～、きゃわゆぃ～ね！　ねえねえ、彼氏いるの？」
私は黙ったまま、俯いた。自然と、顔が赤くなるのを自分でも感じた。
それを見たルクスが嫌らしげに笑う。
「なんだ～、彼氏いるんじゃん」
痺れをきらしたハークが言った。
「ルクス、いい加減にせんと、こちらから、強制的に中継を切断するぞ」
「わ、分かったよ。んじゃ、ね。真帆ちゃん」
モニターがブツンと音を立てて消えた。

「あの……誰なんですか？　さっきの人」
ハークは頭を抱えたまま、言った。
「奴もああ見えて、百八魔頭の一人じゃよ。ルクス・ボルト・バイジャン。そして、五大魔神、最大の汚点でもある」
私は耳を疑った。
「ええ！　あの人が五大魔神の一人なんですか！」
「まあ、驚いても仕方ないな……。じゃが、奴が五大魔神の中で、もっとも強いんじゃ。

実力は大したもんじゃよ、不思議なことにな」
　うんうん、と何回も頷いて、納得した仕草をした。
「……分かる気がします」
「ん？　どうしてじゃ？」
「だって、ハークさん。足も短けりゃ、身体も小さいし、それに……あんまり強そうに見えないし」
　ハークは唾を飛ばしながら怒鳴った。
「何を言っておるか！　この姿は仮の身じゃ。確かに、実力はルクスの方が上じゃがな」
「仮の身って？」
「つまりだな……ワシら、五大魔神は、普段、魔力の消費を最小限に抑えるために、皆、己の身を小さくするものなのじゃ。ルクスは人間のような姿じゃが、ワシなどはぬいぐるみのような姿じゃろ？」
「あ、はい」
　私は思った。
　自覚してたんだ……。
「なぜ、魔力を最小限に抑えなければならないのか……。というのも、ワシらが封印した

魔王派の魔族達を、この世に出さないためなんじゃ。ワシらはその封印した地の精霊や魔将と呼ばれる者たちと契約し、魔力を与える代わりに、彼らに封印を解かれないよう封印地を護ってもらうのじゃ。まあ、ギブ・アンド・テイクじゃな」

私は彼の話を聞いて、もう二頭身の姿を見て笑ってはいけないな、と思った。

ハークはオペレーターに指示した。

「各員、ハーリー号に搭乗準備！」

なにやら、辺りが騒がしくなってきた。

「あの……ハーリー号って？」

「高速空中戦艦じゃよ。自衛隊も保有しておらん」

ハークが自慢げに笑う。

「今から、〝悪魔の蓄音機〟を壊しに、フランスに行くんですか？」

ハークが鋭い目つきで答えた。

「ああ、今度こそ、ぶっ壊してやるわい」

「じゃあ、ルクスさんも？」

「いや、奴は別の任務があるんでな」

「別の任務？」

「うむ、確かに魔王派の魔族はほとんど、封印したのじゃが、新しい魔族も生まれてきた

のでな。中には、ワシらに反発する者もいるんじゃよ。ルクスの任務は魔族の鎮静化じゃ。他の五大魔神も似たようなことをしておる。うち一人が行方不明なんじゃが……まあ、ワシ一人で十分さ」

ハークは私の肩……には届かないので、膝をポン、と叩いた。

「ま、待ってください！」

「ん？」

私は胸の前で拳をつくって言った。

「わ、私も……私も連れて行ってください！」

ハークは目を丸くした。

「なんじゃと！　なにを言っておるか！　ワシらは遊びに行くわけではないのじゃぞ。戦争に行くんじゃ！」

気がついた時、私は涙を流していた。

胸が苦しくて張り裂けそうで、とても辛かった。

でも、私はここで動かなきゃ、ダメなんだ。

先輩だったら、絶対にそうするよ。

「わ、私、今じゃなきゃ、ダメなんです。今、止まると、もう走れない気がするんです。

今が一番、苦しい時なんです。先輩が……言ってました。『苦しい時でも、少し我慢して走れ。そこで止まったら、一生走れなくなる。だから、我慢して走れ。しばらく、走ったら〝窓〟は開ける』って……。だから、私にも走らせてください！」

ハークは獣の顔をして、私の目をじっと見つめている。

私も負けじと睨み返した。

緊張した空気の中に、可愛らしい子供の声が聞こえた。

「いいじゃん、連れて行けばさ。どうせ、その〝悪魔の蓄音機〟が動いちゃったら、世界は壊れるんでしょ？　そうなったら、みんな死んじゃうんだし」

そう言ったのは、青い小猫、ペータンだった。

「ペータン」

ハークはしばらく私を難しい顔で睨んだあと、深いため息をついた。

「分かった、分かった。好きにするがいい。ただし、命の保障はないぞ」

「ありがとうございます！　ハークさん」

そう言って、深々と頭を下げる。

ついでにペータンにもお礼をした。

「ありがとう、ペータン」

ペータンは照れくさそうに、しっぽを振った。

7―2

モニタールームに激しいベルが鳴り響いた。
「んじゃ、ボクはここで……」
そう言ってペータンは去っていった。

「ところで、どこにその戦艦はあるんですか?」
「ここじゃよ」
「え?」
ニヤニヤ笑うハークの手には小さなボタンスイッチが握られていた。
ボタンを押すと、部屋全体が大きく揺れた。
「な、なんですか、この揺れ……」
「じゃから、このモニタールームが指令室なんじゃよ」
「ええ!」
「つまり、この地下の建物は戦艦の内部じゃ」
ハークは自慢げに、この戦艦について、説明してくれた。

全長２３２ｍ総重量３２，７６２ｔで、乗組員、六百人収容可能。
５０ｃｍ砲三連装三基、３０ｃｍ両用砲連装十基、他多数のミサイルが三十基。
半日で世界一周が出来るハーリー社開発の高速エンジン、ビートフラッシュを搭載……。
などなど、ハークはベラベラと話していたが、私にはさっぱり分からなかった。
とにかく、すごい戦艦ということは分かったけど。
「真帆、おぬしはちゃんと、シートベルトを締めろよ。人間の身体では耐えられんからな」
私は彼の言った事がよく理解できなかったけど、とにかく言われたとおり、指令室の椅子に座り、シートベルトを締めた。
ハークは指令席に座ると叫んだ。
「出撃準備、どうだ!?」
「乗組員、すべて確認……大丈夫です!」
ナビゲーターがたくさんのボタンを押しながら、叫ぶ。
「よしハッチ開け」
「了解！　第一ハッチから、第六ハッチ、全て開きます!」
「ビートフラッシュ、レベル９まで上がりました」

乗員がせわしくボタンを押しまくり、ピカピカと点滅モニターとにらめっこしている。

ナビゲーターがハークの方を振り返る。

「艦長！　全てオールグリーンです！」

ハークはこの時を待っていたと言わんばかりに、気合を入れて叫んだ。

「出撃！」

艦内が大きく揺れる。

「カウント、入ります……５・４・３・２……出ます！」

その直後に、ものすごい重力が私を襲った。

「きゃあああ！」

私は、自分の小さな胸が重力によって押し潰され、更にペチャンコになるのでは不安に思った。

「大丈夫じゃ！　すぐにＧはなくなる」

ハークは私と違って、涼しげな顔でいる。

やっぱり、魔族なんだな、と再認識した。

しばらくすると、彼の言った通り、苦しかった重力は消え去った。

ハークが「もう、席から立ってもいいぞ」と言ったので、恐る恐る立ってみた。

「はあ、びっくりした……。あの、ところでこの船はどこから、出るんです」
彼は自慢げに語る。
「うむ、この戦艦はワシらが非合法的に作った巨大地下水路を通って、東京湾を抜けたあとに、上空へと飛び立つのだ。どうだ、このスケール。圧巻の一言じゃろ」

ふと、艦内の窓を見た。
景色がピュー、と流れていく。
私は今まで、こんな乗り物を見たことがなかったし、乗ったこともない。
ハーク曰く「ワシらの技術はおぬしらの社会の技術と百年違う」だ。
私は彼にに「年頃の娘がそんな汚い格好ではいかん」と嘆かれ、新しい服を渡された。
考えてみれば、軍事施設で着ていたツナギのような服をずっと着ている。
指令室を出て、乗員室に入った。
ふと、鏡を見た。一年ぶりにみた自分はとても変だった。
髪は一年間もほったらかしだったので、ショートカットのはずが、肩まで伸びきっていた。
それに陽にあたらない施設の中で、ずっと眠っていたから肌も青白かった。
私は自分で鏡を見ていられず、直ぐに顔を洗った。

そして、そばに置いてあったハサミで髪を切った。
いつも、お母さんに髪を切ってもらっていた。
お母さんが死んでからは、自分で髪を切っていた。
別に、美容院に行くお金がなかったわけじゃない。
他人に自分の髪を切られると、お母さんとの思い出まで切られてしまいそうな気がしたからだ。
お母さんが死んでからは自分で切るようになった。
だから、髪を切るのはけっこう得意だ。
人の髪を切ってあげたこともある。
友達は、
「真帆って髪、切るのうまいよね。なんか、優しい切り方なんだよね」
と、言っていた。
そう言われて、なんだかお母さんのことを褒められた気がして嬉しかった。
「よし、いい感じ」
私は軍事施設で着せられたツナギを脱いだ。
今度は鏡で身体を確かめた。
一年前と変わらない、貧相な胸……。

肩を落とした。

私は二年前のことを思い出していた。

7―3

その日は、すごい大雨。
陸上部のマネージャーだった私は、いつものごとく先輩の〝一人練習〟につき合わされていた。
別に、先輩に「練習につき合え」と言われたわけじゃない。
私が勝手に先輩の練習が終わるのを、ただ、見守っているだけ。
そうしたいからやっている。
先輩は陸上部の長距離。
部の中では一番、速いけど、部活の練習だけでは物足りず、いつも部員のみんなが帰っても一人で頑張っている。
私はそんな先輩の後ろ姿を見るのが、とても楽しい……というか、好き。
「せんぱ～い！　大雨ですよ！　風邪、ひいちゃいますよ」
「ああ、分かった！」
先輩がびしょ濡れで、グラウンドから走ってきた。
「やべぇ。傘、持ってきてねぇよ。お前は？」

「あ、私もです……」
「仕方ない。部室で雨宿りでもするか？」
「あ、はい」
私と先輩はグラウンドの隅に並ぶ、陸上部の部室に入った。
先輩は雨で濡れたシャツを脱ぎ、スポーツバッグから、新しいシャツを取り出して、着替えた。
「わりい、お前まで巻き込んじゃ……って、お前……それ……」
先輩は私の胸を指差して、固まっている。
「え？」
目を下ろすと、私はビックリした。
「きゃあ！」
私は気がつかないうちに、雨でびしょ濡れになっていた。
白いTシャツからブラジャーが透けて見えている。
「こ、こっち、見ないで下さい！」
「あ、うん……」
先輩は素直に後ろを向いてくれた。
「ど、どうしよう……」

私がパニックを起こしていると、先輩がさっき、着たばかりのシャツを脱ぐ。
後ろを向きながら、そのシャツを私に差し出した。
「使えよ」
「え、気にしないで下さい」
「俺がすんだよ。使えって」
「あ、ありがとう……」
私は先輩の背中を見て、ドキドキしながら着替えた。

「もう、いいか?」
「あ、はい」
先輩は上半身、裸で部室の長椅子に座った。
私は先輩と少し間を置いて、隣りに座る。
「あ、この洗剤って、駅前のスーパーの商品ですよね」
「よく分かったな……って、お前、犬かよ?」
私と先輩は笑った。
先輩には悪いとは思ったけど、もらったシャツはとても、いい匂いがした。
私は自分のことを変態だな、と思いながらも嬉しかった。

「なに、ニヤけてんだよ。気持ちわりぃな」
「へへへ……」
先輩はスポーツバッグから、水の入ったペットボトルを取り出し、飲み始めた。
「あの、先輩……」
「ん？」
私は、手をモジモジしながら訊いてみた。
「せ、先輩って、やっぱ巨乳が好きなんですか？」
先輩は、水を吹き出した。
「いきなり、なに言うんだよ！」
「だ、だって、男の人って、巨乳が大好きって、雑誌に書いてたから……」
私は自分で自分の胸に手を当ててみた。
先輩は少し顔を赤くして答えた。
「大好きってことはないだろう……。つーか、お前、どういう雑誌、読んでんだよ」
「え、じゃあ、先輩は巨乳じゃなくても、いいんですか？」
「別に……そんなフェチじゃないよ。お前、いつも、そんなこと考えてたの？」
私は頬を膨らました。
「いつもじゃないです！　でも、私って胸小さいから……」

先輩は顔を少しではなく、真っ赤にして言った。
「ば、バカか！　んなことで悩むなよ。む、胸が小さくても、真帆は真帆だろう。それに、大切なのは胸のボリュームじゃなくて、心のボリュームだろう」
そう言われて、私は自分が今まで悩んでいたことが、バカバカしく思えた。
「先輩……よく真顔でそんなクサいこと言えますね」
私がそう言うと顔をしかめる。
「おまえなぁ」
その時だった。
部室の外から大きな雷の音がした。
「あ、けっこう、近いな……って、真帆？」
気がついた時、私は先輩の胸に顔を埋めていた。
「お、おい、どうしたんだ？」
私は肩を震わせながら、必死に先輩の身体にしがみついている。
「こ、恐いよ……恐いよ」
「おい、真帆……。お前、雷が恐いのか」
先輩は私を小バカにするように笑った。
私は身体にしがみついたまま怒った。

「わ、笑わないでください……私のお母さん、今日みたいな、雷の日に死んだんです」
「え……」
「私が十歳の時に、自宅のマンションから落ちたんです……ちょうど、今日みたいな大雨で、大きな雷が鳴っていました。そして……私、見ちゃったんです。学校から帰ってきて、マンションの駐車場で変わり果てたお母さんの姿……」
また、雷が鳴った。私はガタガタ震えてばかり……。
先輩は震える私の身体を、ぎゅっと、抱きしめてくれた。
「真帆、ごめん……知らなかった。俺も十二歳の時に、父さんと母さんをいっぺんに亡くしちまった。そんな俺が笑うなんて、ひどいよな……ごめん」
先輩の身体はとても暖かかった。
なんか、母さんの膝枕の上で寝ているようだ。
そうこうしているうちに雷が止んだ。
「も、もう、大丈夫です」
先輩は顔を赤らめて、私から離れた。
「あの、先輩」
「ん？」
「私、今まで、自分だけ不幸だと思っていました。世界で一番不幸だと思っていました。

でも、違う……。私は母さんを亡くしたけど、先輩はいっぺんに両親を……私、雷くらいで情けないです」

気がつくと、私は涙を流していた。

先輩は笑って、頭を撫でてくれた。

「んなことねぇよ。親を一人亡くそうが、二人亡くそうが、悲しみの比は変わらない。お前が雷を恐がっているのはお母さんを忘れたくないからさ。別に悪いことじゃないよ。気にすんな」

先輩は私に屈託のない笑顔を見せてくれた。

「すごい……」

「え？」

「どうやったら、そんなに強くなれるんです。どうやったら、そんなに笑えるんですか？」

先輩は少し難しい顔をした。

「う～ん、別に強くはないけど……そうだな。お前、一応、陸上部のマネージャーなんだから、走ったことはあるよな」

「あ、はい」

「体育の先生が言ってたんだけどさ。長距離の場合、それぞれ、窓があるんだよ」

「窓ですか？」

「うん、しばらく走っているとさ。苦しくなるっーか、きつくなるだろ？　でも、苦しみやら、腹の痛みやらを我慢して、それを乗り越えた時、苦しみや痛みが和らいで、なんていうか、こう……気持ちよくなるだろう」

そう語る先輩はどこか興奮気味だ。

「そう言えば……そうですね」

「だろだろ！　だからよ、その苦しみや痛みの〝窓〟を何度も開く事で、長い長い距離を走れるっーか、楽しめるじゃん」

話しているうちに、先輩の目は次第にキラキラ輝いてきた。

「その、〝窓〟っていうのは人生に比例できるんじゃないかな。苦しい事や悲しい事……みんな嫌だけど、死ぬわけにはいかないだろう。だけど、少し我慢して前に進めば、きっと、いい事や楽しい事があるって思うんだ。まあ、走り過ぎってのも、どうかと思うけどさ……」

先輩は照れくさそうに笑った。

7―4

ハークから渡された服は少し刺激的だった。
魔族の流行服なのかもしれないけど……。
色は白。
上の服はタンクトップのようなものなんだけど、サイズが小さいから、服の上からでも胸の形がくっきり見える。
ヘソも丸出しで、とても恥ずかしい。
同じく下の服も、お尻の形がくっきり見えてしまうホットパンツ。
気をつけないと、パンツが見えちゃう……。
靴も白いスニーカー。
とにかく、白で統一されてしまった。
着替えを済ました私は、廊下に出て、ハークのいる指令室に向かった。
向かう途中で、なにやら頭の上がガタガタうるさいので見上げると、空気口の金網から、青い物体が振ってきて、私の顔面に直撃した。

「いった〜い！」
「あ、ごめん。お姉ちゃん」
降ってきた青い物体は、青い子猫のペータンだった。
「ペータン！　なんで、君がここにいるの？　さっき、戦艦が出る前に、外に出たんじゃなかった？」
「し〜、ハーク様に見つかるだろ……そうだ、お姉ちゃんの中に隠れさてよ！」
「え？」
「こうするんだよ」
ペータンは飛び上がって、モゾモゾと私のタンクトップの中に入り込んだ。
「なにしているの？」
私の胸の中でペータンは囁いた。
「大丈夫、大丈夫」
ペータンがもぐりこんだおかげで、私の胸はかなり大きくなった。
なんか、不自然なバスト。
私はしょうがなく、指令室に入った。
「着替えましたよ」
ハークにバレるのではないかとビクビクしながら、近づいた。

「うむ、着替えたか。どれどれ……」
ハークが私の方に振り返った。
「お、おぬし……胸が……」
彼は引きつった顔で、固まってしまった。
「に、似合います？」
「あ、ああ、似合っているよ。ワシの死んだ娘の服じゃが、似合っておるよ」
私はハークの亡くなった娘さんは相当、グラマーな人とだったんだな、と思った。
「まだ、現地に着くまで時間がある。休んでいなさい」
秘密基地は地下にあったので、私は時間というものを忘れていた。
気がつけば、施設から出て丸一日が経っていた。
もう一度、乗員室に戻ると、ベッドに横になる。
瞼を閉じると、自然と眠りにつく。

「……ちゃん……お姉ちゃん！　お姉ちゃんってば！」
目を開くと、胸の上でペータンが騒いでいた。
「あ、ペータン……。どうしたの？」
「着いたんだよ。フランスに……」

「え、本当！」
私はベッドから降りて、窓の外を見た。
「うわぁ……」
遥か空から見下ろした下界は、緑の森で埋めつくされていた。
その森の中心には大きな古城がある。
「すごいな～」
私はペータンを胸の中に入れると、再度、指令室へ向かった。
「おお、真帆。着いたぞ」
「はい、なんか、絵本で見たお城みたいですね」
「そうか、おぬしは初めてか……しかし、あの城こそ、邪悪そのもの……」
突然、指令室のモニターから叫び声が聞こえた。
「……ジイ……ジジイ、おい、ジジイ！　聞こえるか！」
モニターに映っていたのは、ルクスだった。
気のせいか、焦っているように見える。
「どうした？　ルクス」
「早くそこから逃げろ！」
「なんじゃと？」

「他のヤツらに先を越されていたんだ！　ちょうど、ジジイの戦艦の真上にいる」
ハークの顔が凍りつく。
「い、いかん！　舵を回せ！」
もう、その時は遅かった。
ぼんっ！
なにかが、小さく爆発した。
その直後に指令室のコンピュータが、危険を察知して電子音を激しく鳴らす。
艦全体が大きく揺れ出す。まるで、地震のような揺れだ。
胸の中に隠れていたペータンの毛が逆立っていた。
何かを恐がっているようだ。
ハークの方を見る。
小さな顔から、どっと汗を流して、その場で突っ立っていた。
「つ、墜落する……」

第八章　黒王

8―1

城は海の底から雲の上へと浮上した。
「移動要塞ってのも、伊達じゃねぇな」
俺はそう呟いて、婦子羅姫の方を向いた。
「なあ、不安そうな顔だな」
「今度の事がうまくいけば、日本の妖怪も救われるのじゃ……不安にもなる」
俺と婦子羅姫は城のてっぺんにある展望台にいた。
ぼーっと展望台から見える空の景色を眺めていると、婦子羅姫が俺の肩に頭をのせた。
「お、おい……」
「しばらく、こうさせてくれ……。妾も恐いのじゃ。果たして、長年の悲願……叶えられるだろうか」
彼女を安心させようと、笑顔で答える。
「へっ、深く考えすぎなんだよ」

「すごいな……そなたは」
「え？」
婦子羅姫に視線を落とすと、彼女の濡れた赤い唇がか弱く開いた。
「強いのじゃ……そなたは……。妾にも、その強さを湧けておくれ……」
その瞳にはわずかに涙があった。
俺は気づいた。
最初に、彼女を見た時、俺はアイツと似ていると思った。
だが、一つ違うところがある。
それは瞳だ。
婦子羅姫の瞳は日本的な切れ長の目を持っている。
それに、瞳の裏には悲しいものが見える。
アイツはそうじゃない。
確かに、悲しい生い立ちを持っていたのは事実だが、いつも大きな瞳を輝かせて、元気よく俺の名前を呼んでくれた。
それが違うところか……。
いや、全く違う人物だ。

「俺は……別に強くなんかない……」
あれ、こんな台詞を、前に話したことがある。なんだろう……。
「お二人とも、ここに居られましたか」
後ろから声が聞こえて、俺と婦子羅姫は慌てて離れた。
振り返ると、そこにはミノがいた。
「じ、爺か……」
「ん？　お邪魔でしたかな？」
「そ、そんなことねぇよ」
俺は否定したが、ミノの目はギラギラと光っていた。
「そうですか……」
ミノは怪しそうに、俺と婦子羅姫を交互に見つめる。
顔を赤らめた婦子羅姫が言った。
「爺、それよりも、用はなんじゃ？」
「あ、申し訳ありません。もうしばらくで、仏蘭西でございます」
フランス……そこに、魔族の城があるらしい。
だが、それを奪って一体なんの意味があるんだ？
「ところでさ……その〝悪魔の蓄音機〟を奪ったら、日本の妖怪達が助かるって話……

どういうことなんだ？」
突然、二人の顔が曇った。
しばらく、押し黙ったあとに、ミノが答えた。
「……それは自ずと分かるというもの……私がここで話せば、それは不粋となりましょう」
「ふ～ん……分かったよ。とにかく、俺はその城に行って一暴れすればいいんだろ」
俺がそう言うと、二人の顔が明るくなった。
「ふぉふぉふぉ。さすがは黒王様」
「まったくじゃ、そなたは粋がいい。妾はそのような武人が好きじゃ」
柄でもなく、照れてしまう。
「黒王様、突入の際、やはり武器や防具などが必要では？」
「そうだな……」
武器……。
そう言えば、ショーンはあの時、古ぼけた槍だけで戦っていたな……。
「ヤリ……何でもいい、槍をくれ」
「槍でございますか？」

「そう、槍。色はこの鎧みたいな黒にしてくれ。あと……顔がすっぽり隠れる鉄仮面もな」
「承知しました……では、早速、用意させていただきます」
ミノは足早に去っていった。
「婦子羅姫」
「なんじゃ？」
「今回の作戦、俺に全部、任せてくれ」
言われて、婦子羅姫は不思議な顔をした。
「別に構わんが……なぜじゃ？」
俺は照れ隠しに頭をボリボリと掻いた。
「その……お前を死なせたくないんだ。俺がお前を守りたいんだ」
婦子羅姫は優しく微笑んだ。
「嬉しいぞ。私の黒王」
婦子羅姫はそっと、俺に近寄り、俺の首に両手を回すと、じっと見つめる。
「ちゃんと、守っておくれ」
唇と唇が微かに重なった。
優しいキスだった……。

もうこの時は、憎しみとか、怒りとか、複雑な感情は全て消え失せていた。
今、俺に見えるのは、この婦子羅姫だけだ。
もう、ショーンも、アイツも、俺には見えない。
俺は人間、遠丸（とおまる）　俊介（しゅんすけ）を捨て、黒王（こくおう）となった。

8—2

一面緑で覆われた大きな森が見えてきた。
ちょうど、中心に古い城がある。
「あれか……」
「そうじゃ、あれが妾の最後の希望じゃ」
「ん？」
何かが、俺の目を過ぎった。
「どうした？」
「あ、いや……」
まただ……見える。
それは俺の目に映ったのではなく、頭の中に映っていた。
ノイズのようなものが混じっていて、しっかりとは見えないが、確かにどこか遠方の映像だ。
変な猫のマークがついた巨大戦艦が空を飛んでいる。
聞こえる……これは……声だ、誰かの声だ。

『……目標確認』
『ハーク様、ついに見つけましたね』
『うむ、やっとだな……。やっと……見つけた……。忌まわしき城め。今度こそ、その姿を無きものにしてやるわい』

なんなんだ？　この猫人間どもは……。
脳内にぼんやりと映し出される映像。

「……まさか、こいつは！」
これは魔王の力なんじゃねぇのか。
ということは、これは身に危険が迫っていると言う信号……。
そうか……そいつはいいや。
「婦子羅姫！　海呪城の高度を直ちに上げろ！」
「どうしてじゃ？」
「敵が下にいやがる！」
「なんじゃと？」

それを聞いたミノが慌てだす。
「下を確認しろ！　敵艦に怪しい動きはないか!?」
いつにない厳しい顔つきで、部下に叫ぶ。
「はい、まだこちらには気づいておりません」
ホッとした彼が俺の方にやって来て、深々と頭を垂れた。
「ありがとうございます。黒王様のおかげで、敵の戦艦を察知することが出来ました」
「よ、よせよ。勘だよ、カン」
ミノは「ご謙遜を」という顔で首を振る。
「いえいえ、これぞ黒王様のお力。御見それいたしました」
「もう、分かったよ……それより、この戦艦。どこのもんだ?」
「それは五大魔神、ハーク・フォゼフィールドの船じゃ」
振り返ると、険しい顔をした婦子羅姫がいた。
「ハ、ハーク……フォ、フォ、フォンデュ?」
カタカナに疎い俺は舌をかみそうになった。
「ハーク・フォゼフィールドじゃ。今、魔族を取り仕切っているのは奴じゃ。奴さえいなければ……日本の妖怪達は……」
婦子羅姫は悔しさを抑えるために、歯を食いしばった。

その悔しさは彼女の顔から、十分、伝わってくる。
「姫……心中、お察しします」
ミノも寂しげな顔でうな垂れた。
俺はそんな二人を見ていられなくなり、思わず、叫んだ。
「バカ野郎！」
婦子羅姫とミノの体がビクッと震えた。
「そんな弱気でどうすんだ！　お前らは……人間が恐れる、あの妖怪達だぞ。俺が小さい頃、読んでいた絵本に出てきた妖怪は本当に恐ろしかった……。そんなに弱くなかったぜ。やっぱ、妖怪も人間と同じで、時代によって風化されんのかよ？　違うだろ……。お前らは、日本最強の化け物だ。もっと、ビシッとしろよ！」
二人は目を見開いて、俺の顔を見つめている。
やがて、お互いの顔を見て頷いた。
「黒王様の言うとおりですな。この老いぼれ、年と共に、若かりし頃の熱い血を全て流しきったと思っておりました。ですが、先ほどのお言葉で、あの、昔の血が甦った気がします」
「すまなかった……黒王」
「だから、謝るなよ。どこに謝罪する妖怪がいるんだ？」

俺がそう言うと、婦子羅姫が微笑んだ。
そうだ。それでいい……。
「よし、これから敵の戦艦に不意討ちをかける！」
ミノが目を丸くして言った。
「なんですと！　相手は五大魔神ですぞ」
俺は鼻で笑った。
「んなこと関係ねぇよ。敵はぶっ潰すだけさ」
自分でも訳が分からないのに、気づいた時は体を動かすよりも先に口が動いていた。
次々と策が頭に浮び、それを口に出す。
「まず、俺が先陣をとって、隙を作る。その間に婦子羅姫は城の中に入れ。そして、海呪城は敵戦艦に特攻をしかけ、白兵戦にもちこめ！」
「は！」
ミノが部下達に、指示を伝える。
婦子羅姫がそっと俺に近づいた。
「黒王、大したものだ。惚れ惚れする……」
「へっ、お世辞はこの作戦が成功してから頼むぜ」
婦子羅姫が皆にわからぬように、そっと、俺の手を掴んだ。

8—3

俺はミノに押されて、嫌々、壇上に上がった。
目前には、五千を超える妖怪達が集まっている。
その場の空気に少し緊張していた。
「あ……え～、まあ、その……今日は……」
思うように、言葉が出ない。
すると、妖怪達から罵声があがった。
「聞こえねぇぞ！　元人間の大将さんよ！」
「そうだ、そうだ！　それでも、魔王か！」
次々と、罵声があがる。
ミノがとめようとしたが、なかなか、やまない。
妖怪の長である婦子羅姫が俺を認めた。
とはいえ、俺が魔族を憎むように、コイツらもまた、人間を憎んでいるのだろう。
しばらく、黙って聞いていたが、とうとう、俺はキレた。
「う、うるせぇ！　黙って聞けぇ！」

興奮したせいか、「ぜいぜい」と言って、肩を震わせた。
「いいか、俺が言いたいのは一言だけだ！」
それまで騒いでいた妖怪達が沈黙した。
じっと、みな俺の方を見る。
五千以上もの妖怪の視線が充てられた。
俺は首を左右に動かせ、妖怪達の顔を見回してから、拳を掲げた。
「異国の化け物なんぞ、ぶっ飛ばせ！」
妖怪達から歓声があがった。
「やろうぜ！　大将！」
「よくぞ言ってくれたぜ！」

ミノがそばに近寄り、「お見事です」と言った。
俺の心は充実感で溢れていた。
妖怪達と、魔王である俺は、いま一つの目標のために繋がった。
「やっちまおうぜ！　黒王さんよ！」
「へっ、元人間にしちゃ、なかなかじゃねぇか！」
気づいた時は、俺も笑っていた。

「黒王様、ありがとうございました。これで、錆びついていた城内にも活気が戻りました」
「んなことねぇよ」
壇上から降りると、ミノに連れられ、格納庫に向かった。
そこには、動きやすい服に着替えた婦子羅姫がいた。
「終わったか」
俺は婦子羅姫の姿を直視できなくなっていた。
「どうした？　黒王」
婦子羅姫が下から顔を覗きこむ。
彼女の服装は動きやすくなったのと同時に、肌の露出が高いものになっている。
床にズルズルと引きずっていた装束とは違う。
色気づいた女忍者が着ているような、短い上着を羽織って、腰に帯を巻いているだけだ。
まるで、人間界のミニスカートみたいだ。
彼女のすらっとした白い脚が露になっている。
それに、胸元が深く開いたデザインなので、彼女が動く度に胸の谷間がチラチラ見え

る。

まったく、目のやり場に困る服装だ……。

「どうされました？　黒王様、お顔が優れませんぞ……。具合が悪うございますか？」

ミノが心配そうに、俺を見る。

「だ、大丈夫だって……」

「そうですか……。あ、忘れておりました。ご要望の物をお持ちしましたぞ」

ミノが差し出したのは、俺がさっき注文した黒い槍と鉄仮面だった。

「へえ、早かったな」

俺は槍を持って構えてみた。

「思ったより、軽いぜ」

「気に入られたようで……嬉しゅうございます。それから、よかったら、これもお使いくだされ」

ミノは俺の後ろに回ると、鎧に何かをつけた。

「ん？　こりゃ……マントか？」

「はい、やはり、鎧にはマントが合うかと……」

「ありがとよ。気に入ったぜ……。じゃ、そろそろ行くか」

俺は鉄仮面を被った。

仮面を被った瞬間、視界が闇一色になった。
ただの鉄仮面なのに、被っただけで、気分が変わる。
全てが黒く見える。今まで、咎めていたことや、迷いなどが、全て消えていく。
まるで、心が黒く染まっていくような気がする……。
これで、敵を何の迷いなく、殺せる。
敵とはいえ、相手は生き物だ。殺していい気がするわけない……。
でも、この鉄仮面を被ったら、何とも思わない。
別に、ミノが鉄仮面に細工をしたわけではない。
俺の気持ちの問題だ。
「ん？　どうした……。姫」
婦子羅姫がおびえた目で、俺を見ている。
「こ、黒王、そなたが仮面を被ると、人が変わったような気がする。とても、恐ろしい眼をしておる……」
「そっか、俺は魔族以上か……」
黒王か……まんまだな。
俺はやるせない思いで、叫んだ。
「よし、出るぞ！」

8—4

俺は海呪城の門前に立った。
それを見たミノが駆け寄ってくる。
「黒王様、本当にそのまま、飛び降りるのですか？　城内には、妖鳥と呼ばれる大きな鳥がいます。それに、お乗りになられた方が……」
「いらねぇ……。婦子羅姫を乗せろ。俺が隙をつくるから、その間に、〝悪魔の蓄音機〟の中に入れ。あとから、俺も行く」
「は！」
ミノが足早に去っていく。
それと入れ替わりに婦子羅姫が現れた。
なにやら、浮ばない顔でモジモジしながら俺の顔を窺っている。
「どうした？　もう、そろそろだぜ」
「いや……さっきはすまぬ。そなたのことを恐ろしいと……」
婦子羅姫はチラチラと俺の顔を見ては、視線を落としている。
「別に怒ってないよ。気にすんな。でも……今は恐くないのか？」

「ああ、そなたは妾を守ってくれると言った。だから、恐くない」
「そっか……んじゃ、俺は先に行くぜ」
門が、「ギギー」という音をたてて、開かれる。
五千メートル近い上空からはぴゅうぴゅうと、強い風が吹いている。
マントがバサバサと激しく揺れる。
考えてみりゃ、俺、真っ黒だぜ。
槍も、鎧も、マントも、仮面も……もしかしたら、心も……。
俺は何も考えずに、門を飛び越えた。
門の外は、青い空。足場などない。
何も考えずそのまま、落下していった。
パラシュートをつけないスカイダイビングのようなものだ。
徐々に、落ちるスピードが速くなる。
「あれか……」
ちょうど、古城の真上に、その戦艦は浮んでいる。
俺は槍を真下に向けて、投げつけた。
別に、そんなに力を入れたわけでもない。
だが、槍は光りより速く、風を突き抜けていく。

戦艦に当たると、厚い何重もの装甲を突き破った。
やがて、「ぼん！」という音が鳴って、甲板から火があがった。
「次は……」
遅れて、俺が戦艦の上に飛び乗った。
何千メートル上から、落ちて来たというのに、体にはなんの異常もない。
これが魔王の力か……。
「この戦艦、デカすきなんだよ」
俺は拳を上空にかかげた。
指先からはビリビリといった、黒い電磁波みたいなのが流れている。
それを厚い装甲に思いっきりぶつけた。
拳を当てたところから中心にして、波のように黒い電磁波が艦全体に広がっていく。
戦艦が大きく、揺れだす。
所々に、火花が散り、機械が故障を訴えている。
それらを確認すると装甲を突き破って、艦内に侵入した。
俺が入ったところは、廊下だった。
中には、頭から猫のような縦耳を立てた兵士が数人いた。
「だ、誰だ！　貴様！」

「黒王だよ、覚えときな」
その猫人間達を拳で黙らせ、奥へと進んだ。
動力部はどこだ？
ドアを手当たり次第にぶち壊して、探す。
「これか……」
そのドアは、普通のドアと違って、〝ＣＡＵＴＩＯＮ〟と書かれている。
コンピュータロックで厳重に守られていた。
「ち、めんどくせぇ」
俺はドアを力任せに蹴破った。
文字通り、扉は大破した。
「さすが、魔王の力」
部屋に技師が何人かいた。
迷うまでもなく、気絶させる。
中は薄暗く、奥には巨大なエンジンが「ブウウウ」という音をあげて、動いていた。
「これか……」
拳を突き下ろす。
たった一撃で、エンジンは鉄クズとなった。

艦がガクンといって、力が抜けたような揺れを起こす。
「よし、こんなもんか……」
俺は力任せに、厚い壁を壊して、戦艦から脱出した。

第九章　月花陣

9—1　9—2

静かだった森に、邪気が広まる。
「な、なんだ。この感じ」
僕は身を起こして、空を見上げた。
気がつけば、北の空から、黒い雲が近づいていた。
「青山、気づいたか」
ドラムも、何かに感づいたようだ。
森の動物や獣達の様子がおかしい。
何かにおびえている感じがする。
「こ、これは……」
ずっと前に、この嫌な感覚を味わったことがある。
これは一年前の……。
「ドラム！」
「どうした？」

「この森には何がある？」
「……なんのことだ？」
「この森の奥に、なにか、恐ろしいような、禍々しいものを感じる……」
「なに……。よし、行ってみるか」
僕とドラムは森を駆けていく。
奥に進むごとに、邪気が強くなる。
なんだ……なんなんだ、一体、この感じは……。
胸騒ぎがする。
「青山！　止まれ！」
突如、ドラムが手を挙げた。
「ど、どうしたんだ？」
ドラムが目を細めて、辺りを見渡す。
「来るぞ……」
ドラムの予感は当たった。
ものすごい数の化け物達が、一斉に襲い掛かってきた。
僕とドラムは互いの背を合わせて構えた。
「いくぞ、青山」

「ああ」
あいにくだが、ドラムとの戦いで符などの武具を全て使いきってしまった。
身体から発する術もいくつか、あるが、危険を伴うものが多い……。
残るは己の体のみ。気術と武術だけだ。
一匹の化け物が僕に飛び掛かる。
拳をつくり、光らせた。
この光りは、気術の一つだ。
全身の気の流れをコントロールし、一点に集中させることによって生じる。
その光りは、鋼にも勝る硬さと力を備えている。
卓越した気術の達人ともなれば、全身を光らせる事も可能だと聞く。
「うおおお!」
拳を化け物の顔面に直撃させた。骨が砕ける音がする。
休むも暇ななく、次は五匹も襲い掛かってきた。
今度は気を右脚に集中させる。
「ドラム、背中を借りるぞ!」
言われて、彼はキョトンとしていた。
僕はドラムの背中に左足を乗せて蹴り上げると、その反動で右足を伸ばし、空中で一

回転した。
五匹の化け物は僕の空中回し蹴りをくらって、呆気なく倒れた。
ドラムは鼻で笑った。
「可笑しな戦い方だ」
そう言うドラムは、武具がなくても術を仕えるので、難なく化け物達を退けていく。
「青山、この魔族達、なにか、おかしいぞ……」
僕は戦いながら、叫んだ。
「どうして!」
「この森の生き物達と同様におびえている……」
「なんだって……」
気がつけば、化け物達は全て倒れていた。
僕は息を荒らして、ドラムに訊いた。
「この森全体が、何かにおびえているということか?」
「ああ……。確かに、この森の魔族は悪さばかりしていたが、ここまで凶暴な姿は見たことがない。この魔族達を操っているのは恐怖だ」
森の奥からは未だに、邪気が強く感じられる。
僕たちは先を急ぐ。

その後も、何回か、先ほどと同じように化け物達が襲ってきた。
いずれも、何かにおびえた目をしていた。
「ここか……」
そこには、どす黒い水が溜まっている堀で囲まれた古城があった。
「ドラム、なんだ……この城は」
横に目をやると、ドラムは額からたくさんの汗を流していた。
「そ、そんなバカな……なぜ、〝これ〟が、ここに……」
ドラムは首を振って、後退りした。
あの冷静沈着な彼をここまでおびえさせる、この古城の存在は一体、何だというのだ。
「ドラム、この城はなんなんだ」
だが口をパクパクと動かしただけで、声を発していない。
「しっかりしろ！」
僕がドラムの肩を揺さぶると、彼はハッとした顔で、答えた。
「こ、この城は……忘れもしない……その昔、マザー全土を滅亡までに及ぼした呪われた城……」
「呪われた城？」
震える指先で口に手をあてる。

「そうだ……通称、〝悪魔の蓄音機〟」

9―2

ドラムは全身の力がどっと抜けたように、その場に膝をついた。

「こ、これが……ここにあるということは〝ヤツ〟も復活したのか……」

一人合点するドラムを、訳も分からずに見ていた。

「なあ、この城の事を知っているのか？」

僕にきかれてドラムは力なく頷く。そしてぽつぽつと、語り始めた。

この地球、マザーをめぐって、戦った魔族のこと。

それらを統べた魔族の王、タイガのこと。

王が行方不明になったあとに、現れた魔王、ロンゼ・ブリード。

そして、魔王がつくった、史上最悪の兵器〝悪魔の蓄音機〟のこと……。

ドラムは語りだしてから、冷静さを取り戻してきた。

この地球に関することを全て語り終えると、立ち上がった。

「つまり、あれが全てを終わらせ、また、全てを創めたのだ」

話のスケールの大きさに、身を震わせた。

「あ、あんな古城が、この地球を……」

「そうだ……地獄はもう二度と見たくない」

ドラムは右手を開くと、古城に向けた。
「ど、どうする気だ？」
「壊す」
「どうやって？」
「月花陣をかける」
そう言うと、ドラムの手は桃色に光っていた。
「そんな！　月花陣は未完成だと、自分で言っていたじゃないか！」
「それは、お前が使っている術のことだ。私の術は完成している」
ドラムが「陰！」と印を結んだ。
城の周りに線が引かれていき、円が描かれる。
やがて円陣に、桃色の花が描かれ、光りだした。
「見ておけ……これが、完成した月花陣だ！」
僕が今まで使っていた術はこれで完成だった……。
しかし、ドラムのかけた月花陣はまだ終わっていない。円陣から薄い膜が球状に広がっていく。
円陣ではなく、球陣となったのだ。
大きな球が城を包んでいる。

「こ、これが……完成した月花陣……」
僕は思わず、息を呑んだ。
「そうだ、お前の使う月花陣には、隙がある。それは円陣だ。所詮、『円では中のものを閉じ込められない』それが、原因だ」
ドラムは人差し指を立てて、腕を上げた。
「忌まわしき城よ。これで、お前を見るのも最後だ！」
その時だった。城の真上に、大きな戦艦が現れた。
「ドラム、あの戦艦は！」
「あれは……」
彼が顔をしかめていると、戦艦から「ぼん！」という爆発音が聞こえた。
しばらくすると、戦艦が傾く。
船の上には、なんと城が浮かんでいる。
青い色の城。
それは戦艦めがけて突っ込んできた。
大きな音を立てて、戦艦と城は衝突する。
煙をあげると、その二つは森の奥へと落下していった。

第十章　タイガの剣

１０―１

艦の揺れが、次第にひどくなっていく……。
私は突然のことで何が起こったのか分からず、ただその場で突っ立っていた。
「た、退避じゃ……総員退避！」
血の気の薄い顔で、ハークが叫ぶ。
「何をしておる！　真帆、おぬしも……」
その瞬間だった。
モニターに、巨大な浮遊城がこっちに突っこんでくる映像が流れていた。
「こ、これは！」
どーん！
轟音が耳を打つ。
気がつけば、私は宙を飛んでいた。
まるで、宇宙船の中みたい。
しばらく、眼に映るものは、全てスローモーションのようにゆっくり動く。

私は宙で背中を反って、そのまま、指令室の壁に頭をぶつけた。
「プツン」と、テレビの電源を消した時のように、意識がふきとんだ。

「……じょうぶ……ねえ、大丈夫？　返事をしてよ！」
頬を二、三回叩かれて、私は目を覚ました。
瞼を開くと、そこにはペータンがいた。
「よかった……お姉ちゃんが死んだら、ハーク様に叱られちゃうよ」
ペータンはにっこり笑って、がれきに埋もれた私を助けてくれた。
「ありがと、ペータン」
「へへへッ、それより、ハーク様は？」
「あ、そう言えば……」
私とペータンは、辺りをぐるっと見渡す。
空中戦艦、ハーリー号は、空から突っこんできた謎の浮遊城と重なるようにして、墜落していた。
例の古城とは、かなり離れたところに落ちたようだ。
私とペータンは半壊した戦艦から出た。
地上には、眼を赤く光らせた獣が二匹いた。

一匹は軍服をきた猫の姿のハーク。
そして、もう一匹はハークより、背は高かったけど、小柄な老人。
老人はミノムシのような汚い格好をしていた。
遠くから見ていた私のところまで、悪臭が漂ってきそう。
「特攻とは、時代遅れじゃのう……」
「ふぉふぉふぉ、年甲斐もなく、あのようなことを……」
二匹の会話は穏やかだが、その目つきはとても険しい。
「おぬし、日本の妖怪じゃな？」
「はい、申し遅れました。弔辞六進坊（ちょうじろくしんぼう）、鮫嶽蛇偶衛門（さめたけじゃぐうえもん）と申します……」
ハークが鼻で笑った。
「笑えるな……」
「そうですかな？　しかし、先日、ある御方にもらった名の方が、私は気に入っているのです。ミノと……」
二匹とも笑ってはいたが、依然として赤い眼のままだ。
「そこもとは、五大魔神、ハーク・フォゼフィールド様と御見受けしますが……」
「ほう、わしも、有名になったもんじゃ」
ミノと名乗った老人が、杖を取り出し、構える。

「では、いざ……」
二匹の間に、つむじ風が巻き起こった。
「覚悟!」
老人が襲い掛かった。
杖を振りかざし、ハークの頭を狙う。
それに対して、ハークはニヤリと笑って、様子を見ている。
振り降ろされた杖はハークの頬をかすめ、地面を叩いた。
ミノは「しまった」と洩らし、振り返る。
そこには、宙を飛ぶ一匹の猫がいた。
爪が、にゅっと伸びる。鋭利な爪は老人の肉を容赦なくそぎ落とす。
ミノは呻き声をあげながら、左腕を押さえている。
「さすがは、五大魔神……この老いぼれ、久方ぶりに血が騒いでおります」
「そりゃ、よかったのう」
「いい加減、私も本気を出させてもらいます」
ミノの口から、黄色い煙があがった。
煙に釣られて来たのか、地面の下から、巨大な百足が一匹、現れた。
ミノはその百足の上に飛び乗ると、杖で頭を叩いて、指示を出す。

百足は足をぞろぞろと動かして、土を這う。
「気色悪いのう……」
そう言いながら、ハークは地を蹴って、宙に飛び上がった。
飛び上がったハークに、百足は素早く、体を巻きつけて捕まえた。
ギリギリと音をたてて、彼の体を絞めていく。
「ハーク殿には、申し訳ありませんが、日本の妖怪のために、死んでください」
ミノは百足でハークを絞め続ける。
「くっ……。やはり、この姿では戦いにくいか」
そう言うと、ハークは百足にガブリと噛みつき、隙を狙ってどうにか逃れた。
地面に足をつけると、二足歩行であった彼が、腕であった前足を地面の上にのせる。
四つ足歩行になったのだ。
ハークは「グルルルッ」と、唸り声をあげて、ミノを睨んだ。
口から鋭い犬歯が覗き、彼の小さな身体から厚い筋肉が浮かび上がる。
彼の身体が、急変化している。
活動し始めた力が、全身を覆っていた……いや、隠していた軍服を破った。
尚も、身体は大きくなっていく。

そこに、現れたのは巨大な獣だった。
全長、五メートルはあるだろうか。
「グオオオオオオー」
その咆哮は耳を押さえていなければ、耐えられないものだった。
「あれが、あのハークさん……」
私は遠くからそれを見ていたのに、思わず後退りをしてしまった。
怯える私を見てペータンが言った。
「そうだよ。あれがハーク様の本当の姿さ。僕も初めて見たんだけどね……でも、部下である僕が見ても、今のハーク様は恐いな……」
普段のハークとは比べようにもならない姿だ。
地面を蹴って、ミノが乗る百足に飛び掛った。
ミノはすかさず、百足から飛び降りる。
ハークが百足に噛みつく。
百足はじたばたと動いて抵抗したが、ハークの巨大な牙は百足をしっかりと捕まえている。
鋭い牙が百足の体に食い込む。
百足も応戦しようと、毒あごで、噛みつこうとした。

だが、ハークに感づかれ、彼の尻尾で叩かれてしまう。
「グオオオオオ！」
ハークはついに百足の頭部を噛み千切った。
渋い顔をして「ペッ」と吐きだす。
その場には、無残な死骸だけが残った。
「うぬ……さすがは五大魔神。しかし、多勢に無勢という言葉もありましょう。これ、兵法の基本というもの」
ミノが杖を天に掲げた。
すると、半壊した浮遊城から大勢の妖怪達が、どっと現れた。
「かかれ！」
妖怪達はいきり立っていた。
各々、叫びながらハークに襲い掛かる。
「グルルルル……」
ハークは、全身の毛を逆立てて、警戒している。
「あ！　ハークさんが危ないよ！　どうしよう……」
私がオロオロして、頭を抱えていると、後ろから雄叫びが上がった。
「いけぇ！　みんな、ハーク様をお守りしろ！」

振り返ると、武装した猫人間達がハーリー号から出てきて、ハークの後ろについた。
ハーク率いる猫人間達、一方、ミノ率いる日本の妖怪達。
双方、向かい合う。
始めから、この時を待っていたに違いない。
がれきの下に身を潜めて、待っていたのだ。
だが、ハーク軍の方が不利だ。
数が圧倒的に違う。
せいぜいが五百人程度。対する妖怪達は、四千を超えている。
ハークが咆哮をあげる。
それに呼応したかのように、猫人間達が妖怪達に襲い掛かった。
戦いが始まった……。
その戦いの結果は、当初から分かりきっていた。
次々と、猫人間達は倒れていき、とうとう、数えるほどになっていた。
「ハーク殿、お命、頂戴！」
ミノが、杖をハークの額に直撃させた。
ハークはもんどりうって、倒れた。
「いやぁ！　ハークさん！」

彼はピクピクと痙攣して、口から泡を吹いていた。
「ハーク様！」
ペータンが泣きながら叫んだ。
気がつくと、私も涙を流していた。
「ハークさんが……ハークさんが……ど、どうしよう。どうすれば、いいの？　私は何もしてあげられない」
うな垂れて、地面に膝をついた。
「ダメだ……。先輩、走れないよう……もう、私走れない。〝窓〟を開けるなんてこと出来ないよ」
涙がぽろぽろと、地面に落ちる。
ぴーひゃらら！　どんどんどん！
笛と太鼓の音が耳を打った。
聞き覚えのある音だ。なんだろう……。

10―2

ぴーひゃららら！　どんどんどん！

『戦場に涙は無意味ですよ。お嬢様』

振り返るとピエロが宙に浮んで、腕を組んでいた。

「ピ、ピエロさん！」

驚く私を無視して、ピエロは首を横に振る。

「ふう……日本の妖怪どもに弱音を吐いては、？お父上〃に申し訳がたちませんよ、お嬢様」

「だ、だって……」

「だって、ではありません。もう少し、ご自分というものを自覚していただかねば……」

ため息をついて、やれやれと肩をすくめる。

「そんなことより助けてよ！　早くハークさん達を助けてよ！」

ピエロが空から地面に降りた。

目を細めて、必死に戦うハーク達を悠々と眺めている。

「そうですね……。畏まりました、お嬢様……」

ピエロは腕を空にむかって、指を鳴らした。
すると、空からコンペイトウのような形をした刺々しい氷塊が、雨のように降ってきた。
氷の雨は妖怪達の頭を狙って、次々に落ちてくる。
彼らは逃げる間もなく、倒れていく。
無残にも、頭部は潰れてしまった。
止まる事を知らずに、降り続ける。
無差別攻撃といえた。
氷塊は妖怪達だけでなく、ハーク達にも落ちてきたのだ。
やっと、立ち上がろうとしていたハークに、氷塊が二つ落ちてきた。
「グオオオオ！」
ハークの悲痛な叫び声が響いた。
それを見ていた敵のミノも絶句した。
「なんたる攻撃だ……これは戦いではない。虐殺だ！」
そう言ったミノの脳天に、氷塊が刺さった。
「ひ、姫……黒王様……」
目を上に向けて、地に倒れる。

敵とはいえ、あまりにも酷い……。
私はピエロに怒鳴った。
「ちょ、ちょっと！　酷いよ、あんなの！　もう、いいじゃない、やめてよ！」
私がピエロの体をポカポカと、叩いた。
叩きながら、彼の顔を見上げる。
その目には、どす黒い闇があった。
「何を言ってらっしゃるのか、よく分かりませんね。私はあなたに言われた事をしただけです。それに、五大魔神のハークが、ここで死ねば、一石二鳥というもの……。ちょうど、いいじゃありませんか」
ピエロはマスクを被っていたが、マスクの上からでも、彼の不気味な笑顔が感じ取れた。
「そ、そんなの、卑怯よ！」
「これはお父上のお望みでもあるのですよ。言ったでしょう。自覚なさいと」
瞳の中はブラックホールのような、計り知れない闇だった。
私は悪寒を感じて、思わず、後退りをした。
「い、嫌よ……絶対に嫌だよ。私、そんなの絶対に許さないから！」
私は降り続ける氷塊を避けながら、ハークのもとへ走った。

腹部と前足から、大量の血を流していた。
「グルルルル……」
ハークは力尽き、瞼が閉じかかっている。
「ダ、ダメ！　ハークさん、死んじゃダメ！」
私は彼の大きな尻尾を引っぱったけど、びくともせず、しりもちをついた。
「と、止まったらダメ、真帆。私は走るんだから！」
そう自分に言い聞かせながら、必死にハークの体を引っ張る。
その時、大きな氷塊が、私に向かって降ってきた。
もうダメかと思った。
私は覚悟して、目をつぶった。
「あれ……」
感じない。痛みも、何も感じない……。
目を開けると、ペータンがいた。
「ペータン！」
ペータンが私をかばってくれたのだ。
その小さな体で、巨大な氷塊を受け止めていた。
小さな体には氷塊の棘が刺さっていた。大きな棘は腹部から背中を突き抜けている。

私は思わず、ペータンに駆け寄る。
泣きながら、棘を抜いてあげた。
「ペ、ペータン、どうして……どうして……」
彼の体は既に体温を失いつつある。
声を震わせながら、言った。
「だ、だから言ってるじゃんか……ボクはハーク様の忠実な部下だよ。その命令は絶対、守るんだ……だから、お姉ちゃんを守った……でも、理由はそれだけじゃいんだ。ボク……ボク、お姉ちゃんが……」
言い掛けて、力尽きた。
「ペータン！」
私は必死に、ペータンの体を揺さぶった。でも、ペータンは目を覚まさない。
「起きて！　起きてよ！　ペータン……笑ってよ……いつもみたいに笑ってよ！」
私は空に向かって、泣き叫んだ。
「いやぁ！　こんなの、いやぁ！」
耳元で、プツンと、何かが切れる音がした。

１０―３　１０―４

１０―３

私は暗くて冷たい、何も無い部屋にいた。
「ここは……また？　なの……」
真っ暗な闇に、スポットライトが当てられた。
光りが当てられた場所には、石で出来た大きな王座があった。
「一年ぶり……か」
そこには金色の覆面兜を被った男が一人座っていた。
よく見ると、たくましい背には大きな白い翼。
とてもヘンテコな格好をしているのに、妙に似合っているというか、様になっている。
「久しぶりだな」
私は首を傾げた。
「どこかで、お会いしました？」
「なんだ、忘れたのか？　ほら、海峡で会っただろう」

「え、海峡で……」
　このおじさん、何なのかな……。
「まあ、いい。母は元気か？」
　私は俯いて、答えた。
「母は五年前に死にました」
「そうか……すまない」
「いいんです。私、お母さんが死んでも、周りにいい人がたくさんいたから、寂しくありませんでした……あ、あれ……何でだろう。涙が……」
　涙が止まらない。止められない。
　なぜだろう……この人の前では、嘘がつけない。
「すまなかったな……」
　私は涙を拭いて、おじさんの方を向いた。
「何で謝るんですか？」
　その人は立ち上ると、私の頭を撫でてくれた。
「辛い思いをさせた……全て、私のせいだ……」
　おじさんの手は、とても大きかった。
　私の頭がすっぽり入るぐらい。

頭を撫でてもらうと、なぜか落ち着いた。
暖かい手がとても心地よい。
まるで、母さんの膝枕のよう。
「真帆……」
私は目を丸くした。
「え？　どうして、私の名前を知っているんです？」
おじさんは答えず、私の手に何かを握らせた。
「せめてもの罪滅ぼしだ……。どんなことがあっても、生きてくれ……」
渡された物は、私の手におさまるぐらいの小さな短剣だった。
「それから、お前の大事に想う人間が近くにいる。その人間は破滅に近づこうとしている。早く……早く、助けねばならない。それは、真帆、お前しか出来ないことだ」
おじさんはそう言うと、王座に戻る。
「あ、待ってください！」
スポッライトが消えた。
また、耳元で、プツンという音が鳴った。
１０―４
気がつくと、私はピエロの前に立っていた。

「そ、そんな……あの人は私を見捨てるというのか！」
私を見て、ピエロが叫ぶ。
手には夢でおじさんがくれた短剣が握られていた。
「ピエロさん……あなた、嫌い」
「な、何をおっしゃるのですか……お嬢様……」
「私、お嬢様なんかじゃない……。倉石　真帆だもん！」
短剣を強く握る。剣先をピエロに向けた。
「あんたなんか、大っ嫌い！」
ピエロはおびえて、私に背を向けると、空に飛び上がった。
私と少し、距離をおくと振り返る。
「わ、私に立ち向かうとは、愚かな！　いいでしょう。殺して差し上げます！」
ピエロが拳をにぎって、私に向けた。
拳を開くと、手のひらから、無数の光線が放たれた。
私は思わず「えいっ！」と言って、剣を振った。
振ったと言っても、何も考えずに空間を斬っただけだ。攻撃というには程遠い。
だけど、私が剣を振ると、呼応したように剣が赤く光り、剣の先から灼熱の炎が放たれた。

炎は光線を掻き消し、勢いを緩めずにピエロを襲った。
「ぐわあああああ！　そ、そんなバカなことがあってたまるか！　私は……私は、百八魔頭の一人だ！　こんなところでぇ！」
私がもう一度、剣を振ると、今度は剣が黒く光り、剣から無数の獣が飛び出て、空へ駆け上っていった。
その獣達の姿は皆、皮膚がただれていたり、骨が体から突き出ていたり、首がなかったり……と、五体満足ではない。
まるで、地獄から送られてきたようだ。
獣達は一斉に、ピエロへ飛び掛った。
逃げる事も出来ず、獣達が彼の肉体を貪る。
ピエロは恐怖と痛みから、半狂乱の状態に陥っていた。
息も絶え絶えに呟く。
「こ、これは……タイガの剣」
やがて一匹の獣が空に向かって、咆哮をあげる。
すると、何も無かった空間に黒い切れ目が生じ、徐々に開いて楕円の穴ができた。
その穴は底無しの闇で、中からは黒い腕が何本も蠢いてた。
獣達は引き千切られたピエロの体を引っ張って、穴の中に入っていく。

「い、嫌だ！　嫌だぁ！」
ピエロは心底、恐怖を味わっているようで、残った身体をじたばたとさせて、抵抗し続けている。
だが、獣達は容赦なく、彼を闇の穴へと引き連れていった。
そして、穴が塞がれると、私の手に握られていた短剣が灰となって、風に流された。

気がつけば、氷塊の雨は止んでいた。
ハークは、未だに気を失ってはいたが、息はある。
「よ、よかった……」
私は、地面にへなへなと腰を下ろした。
ふと、北の空を見た。
「あれって……」
そこには、大きな古城が宙に浮んでいた。

第十一章　幻想交響曲

１１―１

敵艦から脱出した俺は、古城に向かった。
向かうと言っても、ただ落下していくだけだ。
「そろそろか……」
飛び降りる前に、空を見上げる。
「来たか」
この敵艦よりも遥か上空から、もの凄いスピードで突っ込んでくる海呪城が見えた。
ミノ……あとは、頼んだぜ。

地上に着くと、深い森を抜け、更に泥沼を飛び越えた。
門の前には、さっき俺が敵艦に向かって投げた槍が、地面に刺さっていた。
地面から、槍を抜くと背後から声がした。
「黒王、もう着いておったか」
婦子羅姫が、ダチョウのような不細工な顔をした大きな鳥に乗って来た。

「ああ」
彼女の顔を見て安堵した俺は、鉄仮面を脱いだ。
俺たちは、大きな門の前に立ち、門とにらめっこをした。
「なあ、これ、どうやって開けるんだ」
婦子羅姫は、難しい顔をしていた。
「わからぬ……。とりあえず、押してみるか」
「う～ん」と言って、巨大な門を手で押す。
彼女の細い腕が微かに強張る。
普段、力仕事などしないはずだ。
そんな健気な姿を見て、愛らしく思えた。
「なにを、ボーッと見ておる？　そなたも手伝わぬか」
「あ、ああ。わりぃ……」
俺が門に軽く触れると、門の中央に紋章が浮んだ。
「なんだこりゃ……」
「これは……多分、そなたと共鳴しておる」
「共鳴？」
「うむ、元々、この城は魔王の所有物じゃ。主が帰ってきたと、認識したのじゃろう」

「ふ～ん……」
門がひとりでに、開き始めた。
「入るか」
「うむ」
俺と婦子羅姫は、城の中へと入っていった。
「きたねぇな……」
城の中は、凄まじかった。
壁の所々に、糞が入っていたし、ネズミはうじゃうじゃ現れる。
それに、腐ったような悪臭が漂っている。死体だ……。
普通の人間が、この場に十分もいりゃ、吐くだろう。
婦子羅姫も、服の袖で鼻を押さえている。
「すごいのう……」
「足元に気をつけろよ」
改めて城の中を、見渡す。
中は塔のように、螺旋階段が上に長く続いている。
やっぱり、登らないとダメなのか……。
「姫、どうする？」

「決まっておろう」
「でも、あんたの体力じゃ、無理だよ」
俺がそう言うと、婦子羅姫は頬を膨らませた。
「バ、バカにするな！　妾はこれでも、日本妖怪の長じゃ。これぐらい、どうということはない！」
そう言って、婦子羅姫は螺旋階段を登っていく。
俺はその後ろ姿を見て笑みを浮かべると、後に続いた。
しばらく、登っていくと……。
案の定、婦子羅姫はぜいぜいと息を荒らしていた。足もフラフラしている。
このままじゃ、足を崩して、下に落ちてしまう。
俺は彼女を呼び止めた。
「だ、大丈夫じゃ、黒王。わ、妾はまだ大丈夫じゃ……」
俺は笑って、彼女に背を向け、腰を落とした。
「な、なんじゃ？」
「乗れよ」
彼女は顔を紅潮させた。
「何を言っておる。妾は子供ではない」

俺はため息をついて、振り返った。
「そうかい……。んじゃ、大人として扱うよ」
わざと、彼女の足を軽く蹴って、転ばせた。
「な、なにをする！」
俺は彼女の腕と膝の下に手を入れて、持ち上げた。
彼女を抱きかかえたまま、階段を登り出す。
「や、やめぬか！　恥ずかしい！」
俺は鼻で笑った。
「恥ずかしいって、誰も見てないぜ」
「妾が恥ずかしいのじゃ！　下ろせ！」
婦子羅姫は俺の胸をポカポカと叩いたが、俺は気にせず、登り続けた。
「ほら、ご到着だぜ」
婦子羅姫を床に下ろした。
彼女は、顔を赤くして言った。
「も、もう、あんなことはするなよ」
「はいはい」
最上階には、大きな壁画と、教会にあるような大きな蓄音機があった。

蓄音機からはいくつものパイプが天井につながっている。
「な、なんだありゃ……」
俺は思わず、息を呑んだ。
婦子羅姫は壁画に書いてある文字をなぞるように、読んでいった。

この城、我のものなり。
この蓄音機、我のものなり。
この力、我のものなり。
その力、マザーを手に入れることにあり。
その力、我の命と共にあり。
我、死す時、共に滅す。
我、求めん時、その姿、現れん。
我、魔王なり。

壁画を読み終えた婦子羅姫の顔は、なぜか、寂しそうだった。

１１―２

「マザー、だと……」
　困惑する俺をおいて、婦子羅姫は、蓄音機の前に立った。
　そっと、何かを取り出す。
　それは、小さな薄い円盤だった。
　なんてことのない、ただのレコード。
「レコードか？」
「うむ……。べるりおーずの『幻想交響曲』じゃ」
「ベルリオーズ？　そーいや、音楽の授業で習ったような……」
　婦子羅姫は、蓄音機にレコードをのせ、針をかけた。
「しかし、驚いたな。妖怪でも、クラシックとか聴くんだな」
　ちゃかす俺を無視して、姫は話を続けた。
「この『幻想交響曲』は正に、人間そのものじゃ。このようなものは、妖怪には作れない代物じゃ……。第一楽章は夢と情熱、第二楽章は舞踏会、第三楽章は野辺の風景、そして、第四楽章、断頭台への行進、ここで男は愛人を殺してしまい、死刑を宣告され、断

頭台へ向かって引かれていく……。第五楽章、魔女の夜宴の夢は、地獄に堕ちた男が、自分が殺した愛人と再会するのじゃ。じゃが、愛人は下品な娼婦へと成り変っていた。残ったものは絶望……それだけじゃ」

言いながら、蓄音機を作動させる。

「この蓄音機は……れこうどを奏でる……。ただ、奏でるのではない。曲を具現化するのじゃ。本当の事になるのじゃ……」

大きな雷が城に落ちた。ガラガラと音をたてて、城壁が崩れる。

その直後に、城が大きく揺れ始めた。

どうやら浮上したようだ。

「ちょ、ちょっと、待ってくれ！　こいつはどうなってんだ？」

婦子羅姫は、黙って目をつぶっている。

蓄音機から流れる音楽を聴いているようだ。

「慌てるでない……。動き始めたのじゃ。〝悪魔の蓄音機〟が……」

曲は、第一楽章と第二楽章と第三楽章が終わり、第四楽章が始まろうとしていた。

その時だった。城がゆっくりと動き始めた。

「さあ、始まるぞ。転生じゃ！」

婦子羅姫の笑顔は、歪んでいた……。

その時、俺は思った。
彼女は、何かに縛られている。
そして、それから、逃げられないでいる。
第四楽章に入ると、曲のテンポも速くなり、音も凄まじくなる。
ふと見ると婦子羅姫は、笑いながら、舞っている。
俺はと言えば呆然としていた。彼女が狂ったのではないかと……。
「姫！　どうしたっていうんだ！」
「ハハハハッ、黒王よ。そなたも、踊らぬか」
俺は、そんな彼女を見ていれず、思わず、彼女の頬を引っ叩いた。
姫はハッとした顔で、俺を見た。
「黒王……」
「一体、どうしたっていうんだよ？　らしくないぜ、姫！　あんた、日本の妖怪の長なんだろ？　今が大事な時なんだろ？　ビシッとしろよ」
彼女は、俯いて部屋の壁にもたれかかった。
「そなたには、わからぬ……妾の苦しみを……」
その言葉にカチンときた。
「ああ、わかんねぇな！　今のあんたは、マジでわかんねぇよ！」

婦子羅姫の頬に、涙が流れる。
気がつくと、曲は第五楽章になっていた。
第五楽章が始まると同時に、蓄音機から銀色の光りが放たれた。
「始まりおった、地獄の輪舞じゃ……」
蓄音機から放たれた銀色の光りは、パイプを通じて、城全体に広がる。
「何が始まるんだ……」
俺は恐る恐る、窓から外の景色を見た。
「なんだ、こいつは!」
窓から見えた景色は、一面、火の海……。
蓄音機から流れる音色は、灼熱の炎に変換され、地上を襲ったのだ。
下界は、炎で覆いつくされた。
美しかった緑の森も全て炎で赤く染まった。
森の住人、魔族や動物たちの悲鳴もここまで届いてきた
「おい! 姫、どうなってんだよ!」
「浄化しておるのじゃ……」
「じょうか……だと!」
「そうじゃ。一度、世界を元の姿へと戻すのじゃ……」

婦子羅姫は、近寄って、俺の頬をそっと撫でる。
「そして、新しい妖怪の世界を創るのじゃ」
俺は愕然とした。
「な、なにいってんだよ。そんなことしたら、人間も動物たちも死ぬし、それこそ、今、戦っているミノや残された妖怪達まで、この城の業火で死んじまうぞ！」
彼女は涙を流しながらも、必死に笑って答えた。
「それは、皆、承知じゃ……」
「なんだと！　みんな、知っていて、そんなことするのかよ！　何の意味があんだよ！」
「知ってのとおり、我が国の妖怪は絶滅の危機にさらされている……。弱体化した今の妖怪達は人間達に住む場所も追いつめられている状態じゃ。昔のような力は残っていない。時代というものは恐ろしい。妾も、妖怪の長などと、言っておるが、父上から受け継いだだけじゃ。力などない。そこで、一度、地球を壊すのじゃ。この地球、別名マザーは過去に何度も、崩壊して、その度に再生して来た。その力を、利用するのじゃ。妾とそなた以外の生き物を全て抹殺する……幸い、この城だけは生き残れる。そして、誰もいない地球が再生し始めた時、妾とそなたの間に生まれた子供達がより良い世界を生み出す」
「じゃあ、なんで、他の妖怪達は消されるんだよ！」

「今の弱体化した妖怪達では、来世に立ち向かうことはできん。だから、魔王の力を持つそなたの子供を妾が生み、最強の妖怪達を創る」
俺は婦子羅姫の話を聞いていて、胸が張り裂けそうだった。
こいつらも、かわいそうだ。
悲しい……だけど、こんなの間違ってる。
絶対に間違ってる。俺はこんなこと、認めない。
「本当に、そう思ってんのかよ？　最初から、諦めていいのかよ？　こんなんで、あんたは満足なのかよ？」
「仕方ない……」
「そうか……じゃあ、俺はおりるぜ」
「な、なぜじゃ！　妾のことが嫌いなのか？」
「んなわけないだろ……でもよ、この地球は、俺が好きだった人間達が住んでたし、みんな、愛していた……いや、違う。こんなこと、言いたいんじゃない……」
話している途中で、婦子羅姫が言った。
「妾ではない、他の女を想っているのか？」
言われて、アイツのにっこりとした笑顔を思い出した。
「ああ……。忘れられないヤツがいるんだ……」

婦子羅姫は、無表情で俺を見ていた。
「そうか。好きな女がいたのか……」
「だから……俺はあんたとは行けない」
彼女に背を向けると、歩き始める。
「待て！」
呼び止められて振り返ると、婦子羅姫が胸元に隠していた小刀を取り出して、構えていた。
「妾と戦え！　妾とて、妖怪の長じゃ、恥をかかせるな」
俺は微笑って、槍を強く握った。
「そう……だよな……そんなに甘くないよな……」
姫は真剣な眼差しで、俺を見つめる。
「黒王、妾と戦え」
「なあ、鉄仮面、被っていいか？　俺、これないと、ダメなんだ」
「好きにするがよい」
鉄仮面を被ると視界が闇一色になる。
俺は槍を持って、構えた。
「ええい！」

最初に向かってきたのは、婦子羅姫だった。
小さな小刀で、俺に飛び掛ってくる。
俺はすっと、身を乗り出した。
勝負は一瞬で決まった。
真っ黒な槍が、小さな胸を貫いていた。
婦子羅姫は、笑ってこう呟いた。
「……ありがとう……私の黒王……」
俺は耐えられず、槍を抜くと、投げ捨てる。
倒れ掛かった彼女を抱きかかえた。
「姫……」
俺の涙が、ぽたぽたと、婦子羅姫の顔に落ちる。
「くそおおおおおお!」
どくん……どくん……どくん……どくん……。
また、この音か……。
そうか……この音は、魔王が甦る音か……。
「もう……どうでも……いいや……」

第十二章　怒黒殺

１２―１

　僕はうろたえているドラムに怒鳴った。
「ドラム!」
　彼はハッとした顔で僕に目をむける。
「いかん、青山。どうやら城が動き始めたらしい・・・」
「じゃあ、一刻も早く城を止めなきゃ!」
「ああ、わかった。では、私の背中に乗れ」
　そう言うとドラムは背中から紫色の大きな翼を広げた。
「うん!」
　僕はドラムの背に飛び乗った。
　ドラムのスピードは並外れていて、古城へと一瞬で追いつく。
　古城へぐんぐんと近づき始めるにつけて、僕は何故か手から震えが止まらなくなっていた。
「どうした?　青山?」

「わからない…この邪気、魔王のだろ？」
「ああ、だろうな」
「似てるんだ…」
ドラムが眉間にしわをよせる。
「なにに？」
「一年前の…あの時の感覚と…」
しばらくすると、城から真っ赤な炎が空へと昇っていった。
「ドラム！」
「ああ！」
ついに〝悪魔の蓄音機〟が動き始めたんだ。
僕たちは城の入り口を見つけると、すぐさま螺旋階段を駆け上っていった。
そこには綺麗な色白の顔をした女の化け物が倒れていた。
そして、その隣には青年がひとり泣いていた。
身体が金色に光っている。
「あの子が魔王？」
まだあどけない顔をした青年じゃないか。
だが、ドラムは驚きもせず、魔王を殺す気のようだ。

「何を驚いている？　青山」
　ずしずしと魔王にむかっていく。
「あの青年が本当に魔王なのか？」
　ドラムは獣のような険しい目つきでいった。
「当たり前だ。魔王は人間の体内を借りて生きている。あの青年を殺さなければ、世界は滅びるぞ。それに…」
　彼はため息をつき、頭を左右にふった。
「それに？」
「あいつは、魔王はお前の、青山の…探していた化け物だ」
　僕は愕然とした……と同時に、やっと見つけたという喜びと、胸が焼けるような強い憎しみが溢れかえっていく。
「あの子かぁ…。ははは っ、あんなヤツが僕の妹を！　くるみを！　殺したって言うのかぁ！」
　そう叫んで魔王目掛けて、全身の気を拳に集める。
　思い切りぶん殴ってやった。
　魔王は無様に倒れ、そして、金色の光も消えた。
　床に倒れた魔王は、僕とドラムを見てどす黒い邪気を周囲に放った。

赤い目でこちらを睨みつける。
「なんだぁ、お前らは？」
彼の凄まじい邪気で身体が震える。
だが、復讐を果たせる歓喜、いや、狂気で構えた。
「お前は僕の大切なくるみを奪ったんだ！　殺してやる！」
「青山！　お前一人では無理だ！」
「うるさい！　ドラム！　あんたは下がっててくれ！　これは僕の一人の戦いだ」
僕は月花流、最終奥義にして最強の奥義、怒黒殺（どこくさつ）の構えをとった。
この奥義はまだ一回も使っていない。
こいつを倒すためだけにとっておいた技だ。
何故ならば、この技は自分の憎しみだけで右手に気を集中させるのだが、憎しみで気をコントロールするため、術の発動中に右手を吹き飛ばしたり、時には命をも奪ってしまうからだ。
今まで８９代続いた月花流のなかでも、誰一人成功させた人はいないと師匠もいっていた。
「魔王！　たくさんの人々の命とたった一人の家族であったくるみを奪った罪だ！　月花の名の下に枯れ果てるがいい」

腰を深く落とし、右手に気をためる。
ゆっくり、ゆっくりと腕をあげていくにつれ、激痛がはしる。
だが、僕の憎しみはそんな痛みでは抑えきれない。
そして、やっと気が全て右手に集まり、紫色の巨大なボールができた。バチバチと音をたてている。
「月花流最終奥義、怒黒殺！」
紫色のボールが、僕の腕から吹き飛んだ同時に誰かが叫んだ。
「やめてぇ！」
魔王めがけて放った怒黒殺が、全身真っ白な服を着た少女に当たり、文字通り、胸に大きな穴があいた。
それを見た先ほどの邪気は消え失せ、魔王はうろたえながら、少女に駆け寄る。
「なんで、なんで……。？お前〝がここにいるんだ！」
魔王は子供のように泣きじゃくっていた。
「そ、そんなバカな！」
術は成功したが、狙っていた魔王ではなく、見知らぬ罪もない少女を殺してしまったことに愕然とした。
もう術に二度はない……。

その証拠に僕の右手は、肩の先から跡形もなく吹き飛んでしまったから。
師匠の言った通り、僕は復讐を果たせなかった。
「くるみ…ごめんよ、兄ちゃん、仇をとってあげられなかった」
そうつぶやいて、魔王に背をむけた。
「ドラム、お前なら魔王を倒せるだろ？　代わってくれ……」

第十三章　白い翼　最終章　ルージュ
１３―１　１４―１

第十三章　白い翼
１３―１

私は傷ついたハークのもとへと駆け寄った。
「ハークさん、しっかりして！」
彼はうめきながらも、笑顔で私に言った。
「そうか、真帆。お前はあのタイガの子供だったのか」
私もにっこり笑って答えた。
「はい、そうみたいです」
だが、ハークにはまだやるべきことがあった。
そうだ。〝悪魔の蓄音機〟を破壊せねばならない。
「真帆、頼みがある」
ハークが獣の目に変わった。
「〝悪魔の蓄音機〟を破壊してきてほしい」

「えっ？　私が？」
「そうだ、お前の父、タイガの力を持ってすれば魔王の力など及ばぬわい」
「む、無理ですよ！」
ハークは鼻で笑う。
「真帆、お前の背中をよく見てみろ」
「え？」
ふと後ろに首をひねると、背中に真っ白な翼が生えていた。
「これって、私のお父さんの力なんですか？」
「うむ、そうじゃろうな」
「じゃあ私、魔王を倒しにいってきます！」
そういって、私はにっこりとハークに笑顔を見せた。
「頼むぞ」
「はい！」
私は翼を大きく広げて飛びたった。

さすが、お父さんの翼、ものすごいスピード。
そのせいか、肌寒かった。

そして、とうとう魔王の城に着くと、螺旋階段をぐるぐる飛びながら昇っていく。
最上階につくと私はびっくりして、口を大きくあけた。
「先輩…？」
そこには真っ黒な鎧を着た先輩がいた。
そして、先輩は怖い顔をしたまま、全身真っ黒なスーツを着た男の人と睨みあっていた。
隣りには、大きな紫色の怪物が経っていた。
その人は鬼のような怖い顔で先輩に叫ぶと、右手をまっすぐ構え、何か術のような言葉を唱える。
すると手先から紫色の大きなボールが出現した。
どんどん大きくなっていく。
私は瞬時に危険を感じた。
あれが先輩に当たったら死んじゃう。
「やめてぇ！」
咄嗟に先輩の前に割り込んで、仁王立ちした。
すると、ぼこっと私の胸に大きな穴があく。
私は口から真っ赤な血を吐きだして、倒れた。

「真帆ぉ！」
薄れていく意識のなか、先輩が駆け寄る足音が耳に響く。
「なんで、なんで、お前がここにいるんだ！」
私は気を失いながらも答えた。
「やっと…先輩に出会えた」
先輩はずっと子供のように泣きじゃくっていた。
それでも私は嬉しかった。

最終章　ルージュ
１４―１
俺はただ泣くだけだった…。
「なんで俺は二人も大事な人を同時に……」
涙をぬぐって、紫色の化け物と、真帆に大穴をあけた野郎を睨みつけた。
「ちょっと待てぇ！　てめぇ！」
真帆に穴をあけた張本人は振りかえることもなく、代わりに紫色の化け物が黙ってこっちをみている。

「なんとか言えよ！」
　悲しそうな顔で化け物は言った。
「そうか…お前も元は人間なんだったな…。お前のせいでこの青山という人間も大事な妹を亡くしたんだ。だが、お前もずっと一人だったんだな…」
　俺は首をひねった。
「あ？　なに言ってんだ！」
「どうだ？　〝悪魔の蓄音機〟を壊してくれれば、私もお前を殺さない。それで、どうだ？」
「ふざけやがって！　俺だって、こちとら好きで魔王になったんじゃない！　それなのに、どいつこいつも……それに大事なものをなくしちまう…てめぇらも同罪じゃねぇか！　ぶっ殺してやる！」
　どくん…どくん…どくん…どくん…。
　また魔王の鼓動が聞こえてきた。
　俺の身体全身が金色に光る。
「もう……てめぇらもこれで終わりだ」
　俺はもうどうでもよくなっていた。
　守るべき姫もミノもみんな俺の前から消えていった。

一番大事だった真帆も……。
こんな世界、ブッ壊れちまえ。

その時だった。誰かが俺の肩をひきとめるような感じがした。
『ダメだ！　俊介！』
「誰だ？」
その声は俺の胸の中から発していた。
『僕だよ、ショーンだよ！』
「ショーンだって!?」
『そうさ、今まで魔王の力が強すぎて僕は縛り付けられていたけど、今やっと君に話しかけられるようになったんだよ』
久しぶりの彼の声はとても優しく感じた。
『今までのことは僕も全部見てきたよ。辛かったんだね…。』
「ショーン。俺、真帆を守るはずが逆に守られたんだ。もう、どうでもよくなったよ」
『何を言ってるんだ、俊介！　彼女はまだ生きている！』
俺は耳を疑った。
「ほ、本当か!?」

『ああ、わずかだが、まだ息はある。それにどうやら彼女にも魔族の血をひいているらしい。』
「なんだって!?　でも、どうやったら助けられる？」
『君の魔王の力は破壊する力だけじゃない、彼女を助けられる力も持っているんだ』
「でも、どうやって？」
『簡単さ、人口呼吸と同じだよ。眠れるお姫様にキスをすればいいだけさ』
「そんなことで……。ありがとう、ショーン！」

俺はショーンに言われたとおりに、真帆に身を寄せ、かすかに残っているルージュのかかった唇にキスをした。
すると、真帆の背中に生えていた白い翼がバサッと広がる。
大きく開いた胸の穴もみるみるうちに塞がっていく。
そして、瞼をゆっくり開いた。
「せ、先輩…？」
「真帆！」
俺は嬉しさのあまり、真帆を抱きしめた。
こちらを見ていた化け物も驚いていた。

「奇跡だ。そうか、あの娘、魔族の子か!?」
俺に背を向けていた野郎も振り返った。
「な、なんだって!?」
「青山、お前の復讐も分かるが、あの二人も不運で生き抜いてきたんだ。ここは私たちのいる場所ではない。私たちの月花の道はお前の代で終わらせよう。帰ろう、故郷へ」
「ああ、そうだな」
そういうと、二人は俺たちに背を向け飛びたった。
真帆が俺の胸に顔を埋めて、匂いをかぐ。
「久しぶりの先輩だぁ」
嬉しそうに微笑む。
俺もつられて笑みがこぼれた。
「そうだなぁ、久しぶりだよな」
もう離れたくないと、強く抱きしめ合う。
互いの体温を感じることで、俺と真帆は安心できた。
すると真帆はなにかを思い出したかのように、ハッと顔をあげる。
「先輩、私たちにはまだやり残してる事がありますよ!」
「え?」

「これを壊さないと！」
「そうだったな……この城ごと〝悪魔の蓄音機〟をこなごなにぶっ壊そうぜ！」

３年後

関門海峡に新しくかけ直されたその大きな橋は真っ白で、橋の下はたくさんの船が行き交っている。
そして、その日、私は真っ白なウェディングドレスを纏って手にはブーケを持っている。
隣には白い燕尾服を着た大好きな先輩がいる。
その日、大きな橋には遠く遠く、長く続いているレッドカーペットを私たちは歩いている。
一生忘れない日、この日が私たちのスタートラインとなった。

了